
龍と書いてなんと呼ぶ？～他多数～

雨月

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

龍と書いてなんと呼ぶ？　～他多数～

【著者名】

Z2523B

【作者略歴】

雨月

【あらすじ】

とある、少年の非日常の色々な物語

股、始まる物語

一、
今まで、いることにさえ気がついてもらえた私に初めて
きがついてくれた彼は死んでしまったのです。あれから、三ヶ月・
・・ちよつとスケベなあの人は・・・天国に逝けたのでしょうか?

龍と書いてなんと呼ぶ?

「輝、少しは腕を上げたな?」

「ああ、まあ、それなりに頑張ってたからな。ま、あれだけ頑張れば・・・ちよつとは俺も強くなるよ。」

「おじいちゃん、おにいちゃん、ご飯が出来たよ?」

一見すると、とても仲がよい孫と祖父。・・・まあ、今のところはそれであつてゐるのだが、他の家族とちよつと違つところがある。そう、この中で生きている奴は一人もいない。

俺の名前は白川 輝。

実の祖母に事故?で殺されてしまい、スケベ爺とともに素直な妹と一緒に天国でも地獄でもないところで生活してゐる。俺としてはまだ、やりたいことがたくさんあるのだが・・・死んでしまい、どうすることも出来なかつた。お先真つ暗で終わつてしまつた俺の人生だが、爺さんがどうにかして俺を復活させるために努力してくれた。無論、爺さんのライバル(ばあちゃん)をたおすために・・・

「輝、あれから・・・数ヶ月。ようやくお前を現世に戻す方法を

思こ出したや。」

飯を食いながら新聞にH口本を隠しながら見ている爺さんは唐突にしゃべり告げた。「うーん、どうやつたら菜々美に気取られずにあんな感じで見るこじが出来るんだ?ちなみに、俺の妹の名前は菜々美といつ。この妹も、洒落にならんぐらい力が強く、爺さんがふざけたりすると問答無用で鬼になる。

「・・・おじこちやん、そんなの、」飯食べるときには読まないで...」

菜々美よ、そういうものは爺さんの頭を思いつきつ蹴つた後ではなく、前に言つもんだらうつ?見ろ、爺さんが脳震盪をおこしてゐるじゃないか・・・。だが、Hのくらこではあの爺さんは死なない。いや、もとから死んでるが・・・とつあえず、死はないだらう。

「・・・とつあえず輝・・・食べ終わつたらわしの像があるところまで来なさい。そこで話の続きをしよ。Hにこじてはゆつくつと素晴らしき本が見られないからな。」

やつこじと爺さんはすたゞりと走り去つてこつた。俺と菜々美はため息をつき互いに顔を見合わせる。菜々美の顔は少し暗かつた。

「・・・お兄ちゃん、お別れだね?」

「ああ、今まで世話してくれてありがとな。また、死んだときは会いにくるからな。成仏すんなよ?」

「うそー待つてるよー。」

俺は立ち上がり、自分の妹の頭をなでた。もへ、Hんなことをす

る歳ではないが、生きてこたきに出来なかつたのでしてあげてもいいだらう。はじめに言つておぐが、俺は家族思いであつて、システムではない……

「このシステム冗貴い。菜々美タンに骨も魂もぬかれあつて！」

「うわせこ、爺さん……」

俺は顔を出して叫んでいた爺さんに走つて追いつき、華麗な蹴りをお見舞いしてやつた。

そして、爺さんの像があるといひに一人でやつてきた。菜々美は俺と別れるのが嫌らしく、部屋に引きこもつてしまつた。さて、それはそれでいいとして、今日もまた、爺さんの像のポーズが変わつていて。今日はどうやら変身ヒーローの変身するときのポーズか……確かに昨日はマッスルボディーを強調したポーズだったかな？あれは正直、夢に出てきておぞましかつたな。

「…………それからお前を現世に飛ばすのだが……とき
に輝よ。」

「なんだ、爺さん？」

「最後にお前に渡すものがある。これを持つていけ。これがお前を守つてくれるに違ひない。」

渡されたものは……いろいろと難しい文字の彫つてある木刀であつた。なんか、触つているだけで背筋がぞくりとする感じだ。

「輝、この門をくぐるのじや。本当は、菜々美が大きくなつてから

使つてもつじやつたのだが……まあ、さすればお前は現世に戻ることが出来る。しかし、どうなるかはわからぬ。」

爺さんが指差したほうには、爺さんの像が股を開いて待っていた。ぐ、なんかすんごい生き返りたくなくなつたなあ。股くぐりたくねえ～。門か、これ？

「……輝、早くいかんか！」

「え～、だつてよお～こんなのいけるかよ……」

一応、抵抗はしておいたが爺さんはニヤニヤしているようだ。・・・せめて、爺さんの股をくぐる前にしておきたいことがある……！

「爺さん、今まで菜々美に悪戯してきたぶんだ！受けとれえええ！」

俺は持つてゐる木刀を思いつきり爺さんの股にぶつけた。不意を疲れた爺さんは避けることができず、俺の攻撃で床に沈む。そして俺は爺さんの股をくぐつたのであった。

「ぐおおおお・・・輝め・・・やるよつになつたの・・・それに、まだあつこつに言わないといけないことがあつたのじやが・・・自業自得じや。」

股をくぐつた俺は、とある場所に着陸……ではなく、着水した。

ばしじば——ん——！

「ふはああああ！」

俺はとりあえず岸に向かつて泳ぎ……途中でおぼれ始めた。みんな、川に服を着たまんまでおよこじや黙田だぞ？溺れてしまつからな……俺のよう。

ぐ、このままでは再び爺さんのもとに戻つてしまつ。何故だか……・・泳ぎづらい。服を着ているからではないよつだ。

俺は、溺れながらも自分の姿を確認してみた。

白銀に輝く体……鋭く尖つた爪……長く伸びた尻尾……

・そして、顔から伸びている一本の白い線。

どうやら、俺は今、龍になつてゐるようだ。ははは……どうなつてんだこりや？とりあえず、俺は溺れながらも岸に這つて上がるこどが出来た。そして、これがひざひづなることやうへ。

股、始まる物語（後書き）

ええと、どうも、久しぶりです。これからもよろしくお願いします
ね？

犯罪防止運動

二、

私に優しくしてくれたあいつはもう、死んでしまった。あの時、私がとめればよかつたのだが、できなかつた。いまさら、どうしようもないと分かっているが、そのことを考えると心が沈んでしまう。・・本当に、あのスケベな男は死んでしまつたのだ。

私にとって、弟のようだつたあの少年は死んでしまつた。面白い性格で、かなりの無茶をするような子でもあつたが、ちょっととスケベであつた。私としては、もうちょっと彼の成長を見ていたかつたものだ。もしかしたら地獄にいつてる可能性もあるが、彼なら頑張れるだらう。

「がああああつあ・・・・」

ああ、疲れたあ。てか、死に掛けたあ。復活早々、ほんとに死に掛けたよ。しかし、こんな体じや、人前にも出られないね。どうしたものんかなあ・・・・・。

とりあえず俺は、自宅に帰ることにした。だが、先ほども思つた通り・・・・・この姿で道を歩いていたら動物園か謎の研究所に送り込まれるだらう・・・・・さて、困つた・・・・・とりあえず、人通りのめつぽう少ないこの大きな橋の下で生活していれば大丈夫だ。

そこは、俺が葵と出会つた場所でもあつた。そう、ここが俺の高校生活の中で一番、驚いた場所だ。あれから結構死んだほうだし・・・今では人間の形すらしていない。ちなみに、葵というのは俺と一緒に住んでいた龍だ。他にも龍はいた。

ぐううううううう・・・・・

腹も減つたし……何か食べたいなあ……あの時は確か、俺が葵にパンをあげたんだっけ？はじめは食われると思つたけどなあ……でも、龍つて何を食べるんだ？ザリガニ？

そんなことを考えていると、誰かが向こうからやつてきた。やっぱいやばい！！動かなければばれないだろうが……もしかしたら気がつかれるかもしねえ。

「……おら、黙りやがれ……」

「むぐううう……」

隠れようとしていた俺にそんな声が聞こえる。どうやら、誘拐のようだ、俺が過去にあつた中で一番怖いいつかのおじさんよりはましな顔をしているが、今度は間違いなく、誘拐だ！！くそ……どうすればいいんだ！！この姿で出たら大変じゃないか？

俺が迷っている間に、その男は男の子を車に押し込めようとしている。

近所だから知っているが、この時間帯から後はなかなか人が通らない。

つまり、この現場を見ているのは俺だけかもしねえのだ。

俺は、意を決して橋の影から飛び出る。

そのまま飛び……って、俺って空とべたのね？しらなかつたあ。ま、おれはそのまま、背後から男に襲いかかる！！そして、男の首根っこを口でくわえるとそのまま川に放り投げた。すんごい高さまで上昇すると、そのまま男は打ち上げるのをしくじったような花火の「」とく、川に向かつてスピードを上げる。

「ぐあああ……」

男はそのまま川に「ドボン！」はつはつはつはつはつ…さっきまで溺れたいた自分とそつくりだ。みんな、人を川に落としちゃ駄目だよ？お兄さんとの約束だ。

俺は男が戻つてくる前に、男の子を縛っていたロープを引きちぎる。男の子は珍しいものでも見るような感じで俺を見ている。そりやそりや、龍は珍しいだろうな。

「あ、あの・・・助けてくれてありがとソーラー。」

「ぐしゃあああ。」

ぐ、男の子が言つていることは分かるのに、俺はほとんど喋れてねえ。もう一度、ひらがながら勉強するかな？いや、発音からはじめたほうがいいかもしれん。

「あの、僕・・・今日のことは忘れないよーーー！」

男の子はそういうと走つていった。

うん、元気のはいいことだが・・・あまり無茶なことはするなよ？で、俺はようやく上がつてきた誘拐犯を長い体で縛り上げ氣絶させると、警察の前に出てきた。それだけでは分からんと思つたが・・・なんと、警察にちょうどあの男の子が来ていたのだ。俺はそのまま姿をくらますために空を飛ぶことにした。しかし・・・これからどうしようか？この長い体を生かして、うなぎとして生活していくのか？いや、とりあえず、人間に戻る方法を見つけよう。俺はこれ以上人に見られないためにもとある場所にやつてきた。そこは、俺が加奈と出会つた場所で、もう少し下のほうで碧さんと出会つた場所に行くことができる。

加奈と碧さんと言つのも龍だ。

加奈は少々、いや、かなり強情なところもあつたが、面白い奴だつ

た。

碧さんは物腰やわらかな大人の女性といった感じの人だつたが、どこか抜けていた。俺が今、身を潜めているところは黒くなつた大きな木だ。これは、加奈と出会つた時に加奈がこの木を大きな木炭に変えてしまつた。ま、今ではいい思い出だ。しかし・・・困つたものだな。会いに行こうとしても、こんな姿だからなあ。よし、夜になつて会いに行くか！

「ひー、ひー、ひー・・・

「どうやら、誰かがやつてきたようだ。誰かを引きずつつているようでもある。

「・・・よし、ひーなら誰も来ないで楽しめるだらう・・・ぐふふふ。」

「むー！んー！..」

そいつは、ロープで縛つた女の子を連れてきて何かをしようとしている。

・・・・・いつの間に、俺の住んでいる町は犯罪の多い町になつてんだ？・・・・・悪い子にはお仕置きしなくてはー！とりあえず、この悪人に責任とつてもらうとするかな？俺は音もなく忍びより、今にも女の子に抱きつこうとしている変体さんの後ろに回りこむ。そして、ここでも長い体を生かして、奴の首に巻きつけて先ほどまでいた大きな木に思いつきりぶつける。ちなみに俺は悪いやつには手加減しない派だ。

「ほきいいー！」

「ぐああつあああーー！」

そのまま、男は動かなくなり・・・・いや、殺していないよ？ただ氣絶させただけだからね。まあ、なんにせよ・・・これで一人目に姿を確認されてしまった。明日の朝刊にJMA扱いで新聞に出ることがあるかもしれない・・・・。

ロープで縛られている女の子を助けてあげた。女の子は俺を恐怖の入り混じった感じの視線で俺を見た。

「へ、蛇？」

ああ、いつかの俺みたいだ・・・・といふことで、俺は首をおもいきり振ることにした。

「私を助けてくれたの？」

頷く。そして俺は、女の子からわざと離れてほとんど暗くなつた山道を飛び始めた。今気がついたのだが、この姿なら道に迷つても空を飛んで確認することが出来る。しかしそれ、葵たちが龍だったときに一度も空を飛んでいるところを見たことがなかつたから龍はてつ生き空を飛べないと思つてたよ。

俺は、そんなことを考えながら直毛くと向かつて飛んでいくことにした。

三、夜に飛べば姿が消せるとと思つたが間違いだった。

俺の体は白銀に輝いており、少しの光で強烈な光を辺りに振りまいている。これだつたら月明かりの光だけで、勉強が出来るに違いない、無論、螢の光でもオーケーだ。

誰にも気づかることなく、虫の近くまでやつてくことが出来た。はあ、かなりの時間が経つてしまった。さて、これからどうしようか？

「……ほお、みづやく戻ってきたか、輝。」

「、この声は……俺を殺した人物だ。つーことはばあちゃんか？くそ！この俺の姿を一発で見破るなんて……あんた人間か？」

「……かわいそうに……そんな姿になってしまったのう。」

「見、とても哀れんでいるように見える。」

いや、確かに哀れんでいるのだが、何故だかこの先俺の身にどのようなことが起きるか簡単に想像できた。俺のばあちゃんは確かに優しい……だが、それは武士の情け！苦しんでいる相手がいたら問答無用で崖につかまっているのなら、落として楽にしてあげるし、元、人間だった連中を今度、人間に生まれ変われるようにあの世に送るのだ。

「……今度こそ、天国に送つてやう。」

「アサヒ・ゼン・ササニシキ」

や、やられてたまるか！今度こそ絶対にばあちゃんを倒してみせるーーいや、倒せなかつたら再び死んでしまつーー

俺はばあちやんに襲い掛かつた！！だが、顎、胸、股間を瞬く間に突かれ・・・・家の玄関に叩きつけられた。・・・・ああ、もう駄目。てか、前より数倍強くなつてんじやない？

「・・・輝、強くなれ。ばあちゃんは旅に出るからね。」

「・・・ま、待つて・・・ばあちゃん・・・。」

ああ、あらわちゃんは俺の視界から消えた。

所詮、俺は孫だったよ。生きてきた年数が違う。・・・・・あれ？
確か爺さんは98ぐらいで死んだって思うけど・・・・聞いた話じ
や、ばあちゃんは爺さんの年上だったって言つてたぞ？いつたい、
俺のばあちゃんは何歳？と、そんなことを考えていた俺の意識は黒
い幕で覆われたのであつた。ちやんちやん！！

日の光が俺の顔にあたり俺は目を覚まして辺りを見回す。ここは、どこだ？ 真っ白な壁、真っ白なベッド。どうやらここは病院のようだ。あれ、何で俺は病院にいるんだ？ いつたい、何があつたんだ？ 自分の体を見渡す。体中に包帯が巻かれていてまるで、ニイラ男だ。

「…………なんでこんなにうるさいでしょてんだ?」

考えてみた。・・・・あ、そりだ！－思い出した－－俺は確かに手を帰つていたら蛇のような生物に出会つて・・・・（中略）・・・で、確かに龍になつて家に帰ろうとして・・・・あれ？全く思い出せない？あいてて・・・しかも思い出そうとしたら頭が痛い！？

「・・・・・く、ナースコール！－カモン、看護婦さん！－」

俺はナースコールを押して氣を失つた。最後に聞こえてきたのは懐かしい、誰かの声であった。

次に目を覚ましたのは血圧の元、自分の部屋だった。ビーツやら、ベッドに寝かされているようだ。

「あ、田を覚えました！－」

「・・・・・葵？」

と、いきなり葵が俺に飛びついてきた。く、食われる？

「・・・・心配したんですよ？」

「あ、すまん。ところで・・・・なんでおじいじいるんだ？」

「おじいにいたのは、葵、おばさん、加奈、碧さん・・・・あれ？」

「・・・・穂乃香ちゃんは？」

「穂乃香ちゃん？誰ですか、それ・・・。」

俺は、皆に穂乃香ちゃんの説明をしたが誰も覚えていなかつた。
?どうなつてんだ。ま、それは後で調べるとして……。

「いつたい、俺は病院で何をしていたんだ?」

その後、簡潔に加奈に説明してもらつた。

いや、何で加奈が説明するんだ?説明するなら智さんとかの方が得意そうだが?まあ、それはおいておくとして……加奈の説明によるところうなる。

俺が死んで、三ヶ月。

そして、発見されて一週間。

その間俺はどうやら気を失つていたらしい。

そのときの描写は凄い。

どうやら俺は自宅の玄関の前で血まみれで倒れており、瀕死の状態だったそうだ。

あたりには鴉が寄つてきていたらしい……それで、朝一番に気がついたのは新聞屋さんで、急いで警察と救急車を呼んだそうだ。
そして、俺が死んだことを知つた彼ら責めた。

そりやそうだ、事実、俺は死んでいるからな。さて、驚いた警察は家に住んでいた全員を捕まえ、色々聞いたらしい。だが、葵たちも驚いていたので全く事件に進展はなかつた……結果、俺はとりあえず生きているのでこれで良しといった感じになつたらしい……
・いや、一応警察が俺のことを呼んでいるらしいが?

「まあ、生き返れてよかつた良かつた。」

「良くないです!!」

「ナウナウ……」

「やつだよーー！」

はあ、やれやれ。ま、これで何とか丸く収まるかもしない。だが、俺の幼馴染はどうに行つたんだ？なぜ、誰も覚えていないのだらうか？

「わい、とつあえずはこれでいいことじい、輝。」

「なんですか？」

「お前、まだやつてなことあるだらうへ。」

なんかあつたかな？・・・・・ああ、思い出した。

「・・・・・わかりました。明日の学校終わってから行つてきまよ。」

しかし、あたりの皆は笑つていた。なぜだ？間違つてたか？あ、今はどうやら夏休みらしい・・・・・なんか、騙された気分だ。

赤い巨星の・・・

四、

俺が復活して、少し経つた。体も今のところ順調です。心配してくださいました皆様、ありがとうございました。僕は、元気です。そして、夜は葵たちと一緒に寝ています。・・・やましことこは全くないです。

「輝さん、今日ひじあいつを倒しますよーーー！」

「あ、ああ・・・しかし、あんなやつに俺たちで勝てるのか？」

何故、俺が今、葵たちの部屋となっているといひで寝かされるか教えよう。

それは、俺が死んで数日たつたある日、葵が世話をしていたザリガ一が一匹脱走。

そして、俺の部屋に入り込んだそうだ。

何故かは分からぬが、俺の部屋で逃亡生活を送っていたザリガ一は異常なほど大きくなり、水を必要としなくなつた。大きさは俺ぐらいはあるだろう。それを教えてもらつた俺はびびり・・・いや、あれは間近で見たら誰だつて逃げ出しちゃ?さて、そんなわけで俺の部屋には今、化学反応でも起こしたのか非常識なザリガ一が居座っているのだ。

「大丈夫です!!龍がザリガ一なんかに負けるはずがありません!!」

おお、言つねえ。だけど・・・本日ひの家にいるのは葵と俺だけだ。他のかたがたはおばさんとともにどこかに出かけていた。葵

は熟睡していたので置いていかれ……俺にいたってはトイレに入っている間に置き去りを食らった。

「さて、行きましょう……ちやんと勝負するとこには相手に伝えています……」

ザリガニ相手に挑戦状まで叩きつけたらしい……いや、日本語分かるのか？

そんなこんなで……俺はあの土手にせつてきている。俺の隣には目をつぶつて相手を待っている葵がいる。まあ、俺も一応、爺さんからもらつた木刀を持つてきている。

「……輝さん、きました!!」

葵は隣を流れる大きな川を見る。そして、いきなりそれは現れた。

ざばああん!!

好戦的な瞳……真紅に輝く大きな鍔……いかにも硬そうな甲羅……そして、この前見たときよりも威圧感が増している。

「つて、なんか大きくなつてないか？」

そして、この前よりもかなり大きく育つている。しかし、そんなこと関係ないのか葵は右腕を相手に突きつける。

「……ザーリー……今日この食料になつてもらいます……そして、輝さんに部屋を返してもらいますよ?」

おお、かなりのやる気だ。ザリガニもかなりやる気満々で鍔の調子でも試しているのかさつきから開閉を繰り返している。・・・・・しうがない、これも俺の為だ。いや、俺としてはまだ、皆のところに寝たいのだが・・・まあ、しうがないさ。

両者にらみ合つこと、数分。まず動いたのは葵だった。しかし・・・青いにはなんか特技でもあんのか？

「ザーリー、消えなさいー！『激流槍！』」

うん、すんごい鋭い槍状の水が巨大ザリガニに襲い掛かったのはいいけど・・・相手はザリガニ・・・全く平氣そうな顔をしている。黙目じやん、葵。

「ぐ、こうなつたら・・・」

華麗なバックステップで俺の隣まで戻つてくると・・・俺の後ろに回つた。

「ばとんたつちです。がんばってください、輝さん。」

「・・・・あれ、葵は？」

「私はここに応援します。がんばってくださいね。」

結局、俺がやらなきゃいけないのね？

そして葵は俺を思いつきりザリガニのほうに蹴飛ばした。おいおい、あぶねえだろう！――

「短期決戦です！――こうなつたら新しくなった輝さんの力を验らい

なさい……」

「おい、人を新型扱いすんじゃねえ！…」

右からやつてきた鉄を避けて俺は叫ぶ。あたつたら多分、持つてかれるだろうね？相手の違反グローブを左右に交わしていると、後ろから葵の応援もとい、野次が飛ぶ。

「輝さん！避けないで攻めてください！…その手に持っている木刀は飾りですか？それに、そのザリガニは輝さんのコレクションを処理しちゃったんですよ！…」

何？やはり俺が死んでいる間にかなり大変なことがあったのか？しかし、葵め全く、簡単に言つてくれる！…よし、こいつなつたらザリガニには悪いが・・・俺のコレクションを消してしまったやつには同じような罪を取れてやる！…お前は葵の胃袋の中に消えてもらう…！

「うおおおお！…俺のばらだいすをかえせええええ！…」

懇親の一撃！…たくさんの足が生えている相手の腹の下に飛び込んで裁くように木刀を突きつけ、一気に割る！

動かなくなつたザリガニは・・・あつという間に姿を消した。いや、逃げたわけではなく、葵のお腹の中に収まつてしまつた。食われた瞬間はトラウマだ。もう見たくないね。実際、葵の腹の中にきちんと収まつているから怖い。

「・・・・葵、帰る？？」

「・・・・お腹が大きくなつて死にそつです。おんぶしてくれませんか？」

土手に寝転がっている葵はそんなことを言った。いや、何言つてんだ？ 恥ずかしいじやねえか。

「わかった。ほら、背中に乗りなよ。」

「わああいーー！」

俺は結局、葵を背中に乗せて歩き出した。つん、背中に当たつている感触は結構いいね。

「輝さん、家に帰つたら残つたエツチな本は&a m o · # 2 8 8 8
5・殺ですか？」

俺は、どうせいつまかそつか家に着くまで考へたのであつた。

貴女の料理は怖すぎです。

五、

「ううむ。困ったもんだ。いや、何を困っているかといふと……。
。

「ほら、輝。手伝つてよ。」

俺は今、加奈の助けをしている。何をだつて？料理さ。おばさん
に今日の夕飯の当番を言い渡された俺と加奈は一緒になつて奮闘し
ている。これがまた、大変だ。しかし、俺には料理当番の権利が存
在していないみたいで、いわば・・・サブパイロットみたいなもの
だ。横からアドバイスを言つてやるぐらいだ。

「・・・・・加奈、それには卵は入れないみたいだぞ？」

「え？違ひの？」

加奈は今、何を作つているのだろう？さつき見たときは魚の骨の
スープと豚骨スープを混ぜていたのだが？その後は野菜をぶち込ん
でいた気がするが・・・一体、何を作る気なんだ？一応、色々言つ
てみたが・・・いつも加奈が先に入れてから気がつくので俺は別
にいなくてもいいんじゃないかといった感じであつた。

「加奈、一旦それは捨てたほうがいいんじゃないか？」

「ええっ？もつたいないわよ！ホワイティーにあげればいいじゃ
ない！犬は何でも食べるんでしょ？」

ホワイティーとは確か、俺の家にいる犬だ。近頃、見ていないのでどこで何しているかは謎だ。

「…………加奈、そんなことは言っちゃ駄目だ。いいかい、自分で責任持つて処理しないといけないんだぞ？」

「……わかったわよ。」

「うんうん、わかつてくれて俺は嬉しいよ。そんなの夕食として食べた日には、もう一度、昇天しそうだからね。」

「じゃ、責任もって私が飲む。」

「そうしなさい…………いや、やめとけ！」

「つうむ、なんてチャレンジャーな野郎だ。危険を顧みずにそんなことをする人を見るのはこれが初めてだ。だが、変なものを食うのは葵だけでいい。」

俺は加奈からスープを取り上げ、捨てようとする。

「ちょっと、何やつてんのよ！――」

「見ての通り、魔女スープの処理だ。こんなもんをお前に飲ませたら大変だからな。」

何故か、加奈は押し黙った。しまった、言い過ぎたか？

「……輝、私を心配してくれてんの？」

「ああ、当然だ。お前は俺の妹みたいなもんだからな。」

顔を真っ赤にしている加奈。「ふん、こいつの顔はかなり可愛いね。それで、一から作り直しだ。

「あ、輝……。ありがと。」

「？ああ、そりゃどうも。ほら、早く作りないと歸つてくのぞ?」

ぽけっとした加奈だつたが……力強く頷いて残っている材料を包丁で切りにかかる。しかし……加奈はこんなに料理下手だつただろうか？

そして、加奈とともに奮闘した結果……まあ、あれだ……皿をつぶつて鼻をつまめば食えるかもしれん……。

「…………加奈、失敗はよくある。やう、がっかりするんじゃない……」

「…………そうよね。」

そんなにショックだつたのか？顔、真っ赤になつてんだ？ま、まさか……

「加奈、料理酒ビールをやつたんだ？」

加奈の手には料理酒が握られており、中身は……ほとんど減つていなかつた。

「ちよーっと、飲んじゃつた……てへえ……」

「あやり加奈は酒に弱いよつだ。うん、足元ふらふら……顔はお猿さん……せじてこつけられてしまやがった!!

「あやりあーここそこそこしてよお?」

「はあ? 頭撫でひつてか?」

加奈は俺に抱きつこうとしたれかかってこる。全く、龍は酒に強いんじゃないのか? ヤマタノオロチだつてこのへりこじやよわねえよ。

「・・・じいくれなあや泣こちやひだれ?」

お前はあのねずみになつた赤ん坊か? はあ、しょづがない。

「・・・ひり、ここそこ。」

「えへへ・・・」

やれやれ・・・こつの間にか精神年齢まで幼くなつてたのかね?
そんなに長い間になかつたとこつわけではないのだが・・・。

「輝、寂しかつたよお・・・」

「・・・ああ、すまん。」

泣きながら寝てしまつた加奈をベッドに連れて行き、寝かせる。

・・・三ヶ月か・・・意外と長かつたのかもしれないな。

本当に、既には迷惑をかけたもんだ。

しかし・・・結局俺は戸籍上死んだことになつているのだろうか

?それに、学校に行けるのか?そして、俺以外の皆が口をそろえて穂乃香ちゃんなど知らないといつてているが・・・あれはどうなつたのだろう?まあ、今のところはおいといて、俺が今するべきことは・・・後片付けだ。あんな汚いのは久しぶりに見たな。うーん、困った。俺は眠っている加奈の顔を見ながら悩んでいたのだが・・・。

「輝、料理は出来たのか?」

「ただいま、輝さん。」

「輝君、ただいま。」

他の皆が帰ってきたので俺は寝たふりをしたのであった。現実逃避完了!

貴女の料理は怖すぎです。（後書き）

今回は加奈の話になりました。まあ、大体予想すればわかりますが、次は碧さんの話です。御感想のほう、よろしくお願ひします。

白衣のお姉さんヒート

六、

「輝君、他に買つもの何かある?」

「いえ、この店ではおわりのようです。それじゃ、次のお店に行きましょうか?」

俺は今、白衣の女性と一緒に街を歩いている。白衣なんて珍しいものを碧さんが着ているのでさつきからこっちを見ている人たちが多い。いや、碧さんも結構綺麗なのでそれもあいまってのものなのだろう。俺としてはちょっと恥ずかしい。

「・・・・輝君、ちょっと元気ないみたいだけど大丈夫なの?」

心配そうな顔で碧さんが俺に聞いてくる。「へん、こんな美人に心配してもらえるなんて俺つて結構幸せ?」

「いえ、ちょっとさつきから周りの人気が見てくるような気がするんですよ。ええとですね、きっと俺と碧さんが一緒に歩いているからちょっと釣り合つてないって奴じゃないでしょ?」

「? どうかな・・・。ああ、なるほどー。」

碧さんは勝手に納得して頷き、俺の腕に手を絡めてきた。

「これならいいよね?」

「な、何がですか？」

碧さんはにっこり笑い、俺に言つてきた。その笑顔に百点をあげたい。

「ほら、これなら私の身長と輝君の身長は釣り合つてゐるよ？ね？」

う～む、やつぱりどこか変わつてゐるな、このお姉さんは・・・。碧さんがこのような行為に走つたので・・・俺を見る田（主に男から）が殺氣立つてきた。うん、ちょっとこのままいじこいたら危険かもしれない・・・。

「・・・碧さん、ちょっと裏路地を通りませんか？」

碧さんは何を誤解したのか知らないがひょっと顔を赤くし、

「輝君、そういうのは夜になつてからするものよ？まあ、輝君がしたいつて言つならいいけど・・・。」

潤んだ瞳で俺を見てくるが、一応、そんなこと俺は考えていない。

「そうじやなくてですね、もしかしたら裏路地に何か面白いお店があるかもしねないじゃないですか？たまには行つてみませんか？」

「なんだ！そんなことなら早く言つてくれれば良かつたのに・・・でも、ちょっとがっかりだなあ・・・。」

俺もがっかりだなあ・・・じゃなくて、さつとここれから逃げたほうがいいな。さつきよりも殺氣が五割り増し！なんちやつて！・・・さ、馬鹿やつてないで行ったほうがいいな。

裏路地には表通りと違つて静かなたたずまいの店が意外に多かつた。二人で色々と話しながら一時間ばかりうろうろしていると、そんななか、意外な人物が駄菓子屋にて何かをやつていた。そして、その人物が俺に気がつき、目を『ごじご』してから俺を写真で撮つて、お経を唱え始めた。なんだか癪に障るので近づいてみることにした。

「…………黒河、お前の近くにお化けでも出たのか？」

「いや、ちょっと死んでしまった親友のお化けを見てね。ハーレムを取られてはたまらないとわざと成仏してもらつてているところだよ。・・・さて、男の幽霊なんかに取り付かれたら大変だからさつさと逃げなくちゃ。」

そういうて俺の知り合いの黒河くろがわ 暗あんはさつさと逃げていったのであつた。全く、失礼な野郎だ。

「…………輝君、そろそろ帰らうか？椎名おばさんたちが待つてゐるからね。」

「そうですね、そろそろ帰りましょうか？」

俺と碧さんは来た道を帰り始めた。途中で、失礼な知り合いに再び出会うことなく、そして、嫉妬の表情をした男たちに会つてもなく、順調に家を目指して歩き始めたのであつた。そして、家に帰りつくまで碧さんは俺の腕にずっと腕を絡ませたままなのであつた。うーん、いいねえ。

「ただいま。」

「ただいま帰りました。」

二人で一緒に家に帰りつくと、先に碧さんが買つてきたものをおばさんに渡していると葵と加奈がやつてきた。

「あ、お帰りなさい、二人とも。輝さん、珍しいザリガニとかいませんでした？」

「輝、おやつ買つてきた？」

全く、二人とも勝手なことを言つてくれる。

「ほら、青色のザリガニと加奈が言つていたお菓子だ。」

前者はなんだか怪しい店に売つており、後者にいたつては電車で結構かかる隣町に売つていた。本当は午後から行く予定だったが、その用事も増えてしまい、朝早くから探しに行かねばならなかつた。朝起きたのが早い碧さんがたまたまいたので一緒に旅立つたのであつた。その碧さんが俺たちの会話に混じつてきた。

「今日は一人のおかげでいい思いをすることが出来ました。お礼を言いますよ。」

碧さんは葵と加奈に意味ありげな笑いを送つた。対する一人はしまつたといった顔になつたのであつた。

「輝君つて本当に可愛いんですよ。腕を組んだりひょっと慌てるし・・・今日は裏路地に連れ込まれちゃいました。」

「はっ！殺氣が！」

俺が避けたところにはまるでバルタ 星人のはさみみたいなものが

突き刺さっていた。そして、油の切れている首をぎこちなく動かしてみると・・・そこにはスーパーイヤ人のようになつている怒れる一匹の龍が俺を睨んでいたのであった。

「あ、あ、あ、あ・・・・び、どうかしたのか、二人ともっすんごい怖いぞ？」

返事をせずににじり寄ってきた一匹の龍。このまま言つたら俺は・・・どうなるのであるつか？多分、今日の料理は間違いなく、俺の踊り食いになつてしまつかもしれない！

「輝君、私たちを心配させた罰を受けてもらいますね？」

最後に、そんな碧さんとの声が聞こえた気がする・・・ぐばあ！

（アヒル）繁殖

ひよつと、よくなるかもしれません

七、

さて、夏休みも半ばを迎えたこの、俺は黒河より旅行に行かないかと誘われたのであった。わざわざ、俺の部屋に窓から侵入してやつてきた。俺はちょうどその時、まあ、その・・・とあるジャンルの本を読んでいた。人様にいえなことなので伏せさせてもらつ。

「・・・で、由三、返事はどうだ?」

俺が首を振つたら間違ひなく、奴は俺から取り上げた本を葵たちに渡すに違ひない・・・。

「・・・わ、わかった。ぜひとも行かせていただきたい。」

「つむ、ならば葵たちと一緒に今日の午後十時に校門前に集合だ。」

そして、暗は窓から飛び降りていったのであった。俺の本をもつて行つたのであつた。ああ、葵たちにばれないように努力して隠っていたのに・・・。

まあ、そんなこんなで俺達（主に俺と黒河）はひどい田舎つ子定だつたらしい。

「・・・まあ、これって何かの罰ゲームか?」

「さあね、僕が覚えてるのは山で嘘でじょんけんしたところだつたかな?」

季節は夏なのにあたりは吹雪だ。近頃の地球温暖化によつて気候がおかしくなつてしまつたのか？

ああ、俺も覚えている。

黒河のお誘いによつて俺たちは避暑地にまつてきた。
まあ、ついでに山登りをしようとしたので、山に登つた。
そこで、頂上までやつてきた俺たちは帰りは別ルートで帰ることになつたのだ。んで、何故かじやんけんにて男子と女子が綺麗に分かれたのであつた。拾つた磁石を使ったのが間違いだつたのだろうか？それから確かにばらばらに行つたのだが、結果として俺たちは夏なのに吹雪いでいるところにまつたのであつた。

「……白川、やつぱつこの磁石はおかしいんじゃないのか？」

「ああ、まちがいなく、」この磁石だな。俺たちのこの磁石によつて死つとも死に方しないと思つぞ？」

磁石の針は先ほどから右も左に動きまくつてゐる。そして、爆発したのであつた。

「つむ、これで完璧に遭難つて奴だな？」

「ああ、磁石がなくなつたつて事は俺たちは遭難者だ。」

段々、寒くなつてきた。「のままでは鼻水たらたらの石像が一つほど、出来てしまつかもしれない。

「……白川、雪だるまでも作るか？」

「いや、いい提案だと思つが、それには賛成できないな。そんなもんを作る前に俺たちが雪だるまになつてしまつと思つぞ？」

「とりあえず、どこか吹雪があたりないと山を探さないといけない。」

「黒河、この山には山小屋とかないのか？」

「残念だが……聞いたことはないな……しかし、この山には色々と洞穴があるらしい」とは聞いたことがある。「

ふうむ、ならばその洞穴とやらに向かえば何とかなるかもしれん。

「…………よし、行くぞ、黒河！」

気合を入れて一人で歩き出した。といつても、雪が田に入らないようにするだけだが……。で、そんなこんなで数分が過ぎたであろうつか？ 俺たちの田の前にかなり大きな洞穴が姿を現した。

「…………黒河、この山にはもしかしてだが……熊とかいないか？」

「…………いや、聞いたことがないな。しかし……まあ、先に洞穴の中に入らう。」

「…………で、さつきの話の続きを？」

とりあえず、話は後でとくつとで一人で洞穴の中に入った。どうやら洞穴内部はあつたかく、暗闇といった感じだが、内部を見ることが可能であった。まだ、奥のほうに行くことができる。

「ああ、ここの話なんだが……この山にはたまに、雪女が
出るらしいんだ。」

雪女？

「……しかしなあ、それがまた、人型じゃなくて、どっちかとい
うと神様的な扱いなんだ。その姿を見たものはなく、噂では季節は
すれの吹雪のときには姿を現すそうだ。でも、吹雪いている間はほと
んど、人間たちは家の中にはいるから姿を見ないらしい……それ
に、姿を見たものは全て、怪我すると言い伝えられているんだよ。」

なんか、おかしな話だ。見たものがいないならなんで怪我するの
かも分からぬだろ？ し……。

「ま、それはいいとしてこの先に図つたよ？」一いつの道があるが、
進んでみるか？」

「俺が指差すほうには二つの穴があった。ちょうど、二人いるので
ばらばらに行けば時間の短縮にもなるだろ？」

「……そうだな、じゃ、僕はこっちの道を調べてくるよ。」

どちらかがもしかしたら抜け穴になっているかもしれない。どこ
か分からない場所に出ても、そこに人が住んでいるなら何とかなる
に違いない。

「健闘を祈るよ、白川。」

「そつちもな。」

そういうて別れの挨拶を軽く交わす。俺が進むほうは向かって左側の穴だ。さあて、何が出るかな？

洞穴を結構進んだのだが・・・・びつやら、この洞窟には何か鉱石みたいなものがあるらしい・・・・しかも、それはわずかな光を数倍にして反射するものらしく、外から差し込んでいる光で足元を光らせている。・・・そんな便利な鉱石なんて存在するのか？そんなどきだ・・・・俺の耳に何かが叫ぶ音が聞こえたのは・・・・。

先ほど、黒河から聞いた話を思い出してしまった。ぶるぶる、いや、これは寒いから震えているわけです。けつして、怖いから震えているわけではないのです。

八、

奥のほうに進めば進むほど……何かの叫び声は当然のようになりなってきた。それにつれ、鉱石の量も心なしか、多くなってきて、いるような気がする。

「…………」

普通、好奇心で命を落とすようなことはしないと思つが……。残念ながら俺はそんな男だ。と、いうわけで……この音を確かめに言つてきます。

一気に音がするほうへ走り抜けると、そこには大きな空間が広がっていた。

そして、光を放っている鉱石に田が奪われていると……俺の後ろで何かが落ちたような音がした。……誰か、RPGをしていてボスがいるところに行つたら急に戻ることが出来なくなつたということがないだろうか？今の俺の状況はそんな感じだ。とつもなく大きな水晶みたいなものが俺の行く手を遮つていた。

「…………む、向こう側が透けて見えるのにいけないなんてな……」

あっち側は分かるのに……行くことは出来ない。更に、そんな俺に追い討ちが続く。

ギシャアアアアアアー！！

ビリぞのドラゴンがお皿をパツチリ開け、やつてきた勇者でも

倒そつかといったときに鳴く声が再び、俺の耳に届いた。……正直、振り向きたいとは思わない。しかし、このままあつちが見る水晶を眺めていてもいいことなんて一つもないに決まっている。現実逃避をしていてもろくなことがないのはこの前の加奈の時によく、わかつた。あの後は皆から尋問まで受けたのだ。

「…………だ・る・ま・さんガ・・・・・転んだ！――」

振り返つてみた、そこにはすけるよつた肌を持つたかっこいい、龍がいた。

・・・・・その数、一二匹。顔が似ているので双子さんのようだ。うん、顔が瓜二つに見えるね・・・・そして、体が透き通るように見えるから・・・・いやいや、意外とあつち側も透けて見えてるから・・・・うん、クリスタル・ドラゴンってやつですか？それとも、スケルトン・ドラゴンのほうがかっこいいか？

ギシヤアアアア――！

「うう・・・・こんなときはあれだ、こんな化け物を倒すには勇者の剣でもないとやつてられん！――こは友好関係を作るしかない――」

「…………だ、大丈夫だ！俺はお前たちに危害を加える気は・・・・お前たちに隙が出来るまでそんな気はない！――安心して結構だ！――」

龍の返答は・・・・口から吐いた光り輝く水晶だった・・・・。遠慮なく、全て俺に直撃。・・・・心に響く、嫌なものです。・・・・ガクリ・・・・。

「…………うむ、久しづりじやな、輝よ。」

「ああ、久しぶりだな、爺さん、菜々美。元気にしてたか？」

「うん、私は元気だよ？でも、兄さんってば、また死んじやつたの？」

「……全く、わしらに出番をくれるのは嬉しいのじやが……あつやりダウンするもんじやない！！立て、立つんだ輝！！」

「やつだよ、がんばって、兄さん……」

「……ちよ、そんな押すなつて……う、うわああああ……」

「輝、久しぶりに呪文でも唱えるんじやな。」

「ぐ、呪文、忘れちまつたんだよ……『我が名にて命ずる、心の姿を見せよ……』だったかな？」

「よし、多分、それであつてるとと思ひだ？」

「人に半ば強引に追い出され、俺は再び、娑婆の世界に戻ったのであった。正直、もうちょっとダウンしていたかった……。だって、あの龍怖いんだもん！！

そして、俺の目の前には一人の美少女が鋭き刀らしきものを持つてたたずんでいる。

「……ほお、お主、我が姉妹の攻撃を食らつてもなお、立つていられるか？」

「へへ、俺としてはもうちよつと死んでいたかつたんだがね、人間

つてのせむるために生まれてくるもんなんだよー。」

もう一匹はない。どうやら、もう一人の侵入者を排除しに行つたようだ。ぐ、ここはさつとけりをつけないと・・・もしかしたら、黒河が危険かもしね。

「・・・・征くぞーー下郎めーー」

「上等だ！かかってこいや、よくもとんでもない田に合わせてくれたなー！その仕返しはプレゼントして返してやるぜーー。」

光を放つ水晶の欠片がまっすぐ、俺を狙う。しかし、爺さんと菜々美が応援してくれたのだ。やられるわけには・・・いかないんですね、透き通るような肌を持つ、グラ”ン”セラ？」からほ・・・ちゅつと、いたずらしてやるぜーー。

「・・・・よ、は、と、」

飛んできたものは全て避けられた。・・・そして、物干し竿を二つに折ったような長さの水晶らしき物騒なものも避けることに成功。

「・・・・しまつ・・・」

よもや、さつきは成功したので避けられるとはまったく思つていなかつたらしい、龍は制御できなくなつた自分の体重のせいで前に思いつきつつのめつた。

そして、その龍の行き先には鋭くとがつた水晶が牙を向いていたのであつた・・・。

「…………」

結局、俺は敵の龍に手を差し伸べてしまったのであった。後ろから抱きしめるような感じで助けることが出来た。…………掴んだところはちょっと危ないか？まあ、俺のおかげによつて、とがつた水晶は彼女ののどもとでストップしたのであつた。…………うん、彼女の命も救えたし、俺もなかなかいい思いが出来た。

「…………いつまで、触つているんだ？」

「あ、すまん。これは事故だ。」

掴んでいた手を離すと、さつたと俺から離れた。そりゃそりだ、あいてはまだ、ビームも怪我なんてしていなしな…………。

「…………なあ、俺の負けでもかまわないから、話を聞いてもらいたいんだが？」

「…………よからう…………」

ついして、何とか話を聞いてもらえたことに成功したのであった。

九、

俺は、そのままの体制でこれまで何があつたのかをこと細かく伝えたのであつた。当初は、怪しげに聞いていた相手だったが、だんだんと信じる気になつたらしい・・・俺を信用してくれるまでにいたつた。

「・・・ふうむ、なるほど・・・輝が言つには、遭難したということか?」

「ああ、それで、俺の友達と手分けして一つあつた洞穴を進んでいたらお前たちに会つたんだよ。・・・しかし、もう一人はどこに行つたんだ?」

「きっと、輝の友達とやらを探しに行つたらしいな・・・もちろん、悪い意味出だ。どことなく、あいつは気性が荒いからな・・・そんなことなら早く言つてもらえれば私たちも協力したんだがな・・・」

「・

はあ、そっちから攻撃してきたのではないだろうか?もしも、こつちにきたのが黒河だったら今頃、死んでるだろうな・・・いや、俺もいつぺん死んじゃつたな。と、そんな時に龍がいる方向の壁に亀裂が入つたのが見えた。あ、危ない!」

「くそおー!」

「うわあー!」

とびだすな 僕はいきなり とまれない 白川 輝

ぎりぎりで、相手を巻き込むことなく、水晶を全て避けることに成功した。あ、あぶねえ！飛び出でてくるトラック並みにあぶねえ！！

「・・・あ、白川じゃないか・・・」

「ぐ、黒河！」

壊れた向こう側からは黒河がひょっこりと現れた。その肩には誰かを担いでいる。

「・・・黒河、誰を担いでいるんだ？俺たちと同じ遭難者か？」

「うーん、どうだろうね？僕が音がしたので後ろを振り返つたら倒れていたんだよ。しかしまあ、白川、君も好きだねえ・・・。葵ちゃんたちがいるのに・・・」

俺は今の状況を再び解読してみると・・・龍の上に覆いかぶさっていたことを理解した。好都合で、したの龍は気を失っている。

「・・・いや、これは事故だ。断じて、俺が襲い掛かったわけではない。」

「さて、十人中の何人が君の言つことを聞くだろ？ね？」

肩に担いでいた女の子を俺の隣に横たわらせる。・・・い、こいつは・・・俺の下にいる女の子の双子の片割れじゃないか？

「白川、あつちはどうやら他の村に繋がっているみたいだから行ってみないか？それとも、この二人も連れて行くかい？」

もとから、ここに住んでいたから頬つて置いて大丈夫だろう。俺は黒河に嘘をつくことにした。

「いや、この一人はここで人を待つているらしいから、俺たちは先に行こうか？」

こうして、俺と黒河は水晶の洞窟を何とか、ぬけることが出来た。そして、俺たちの目に映つたのは……夏の海であった。……何時になつたら戻れるんだ？

「……辺りには人っ子一人いないが……ここはお前が知っているところか？」

「……いや、全く分からぬ……」

聞こえてくるのは波の音だけだ……いつたい、どうなつちまたんだ？吹雪の次は謎の浜辺か？俺たちは山の中にいたんじゃないのか？

「……白川、あつちから人の声がするぞ？」

黒河が指差すほうにはかすかにだが、何かの影らしきものが見える。……しかし、どうからどう見てもあれは人間じゃないだろう。……。

「……黒河、あの影は人間じゃないだろう？何に見える？」

黒河も気がついたのだろう……顔を少し硬くして俺のほうを見た。

「……そうだね、巨大な蛇か何かじゃないかな？しかも、こっちに向かつて泳いでいるように見えるよ。……まあ、海を泳いでいるなんなら、海蛇だろうけど……空を泳ぐとなるとなんて呼ぶんだろうね？」

まあ、びっくり！近頃の蛇は空も飛ぶりますか？

「……黒河、さつきの洞窟に急いで戻るつ。なんだか俺たちはおかしな世界にでも入っちゃまつたらしいからな。」

「そうだね、僕もその意見には賛同するよ。」

触りぬ神にたたりなし！！俺たちは空を飛んでくる何かがこっちにつく前に水晶の洞窟の中に逃げ込んだのであつた。いつたい、何でここには龍が多いんだ？

「全く、なんて海だ……これじゃあ、水着ガールもゆっくり干渉している暇がない！！」

「全くだ！あんな用心棒みたいなもんがいるなら危険すぎで鼻の下を伸ばせねえな。」

「えええと一人で息を吐きながら呼吸をただす。さて、これからどうしたものだろ？」「

「……吹雪が収まっているかもしれないから、ちょっと戻つてみよう、白川。」

「そうだな。見るだけなら大丈夫だろ?」

今度はやつてきたほうに向かって歩き出す。途中、なぜ開いたかわからない穴の中を覗かず（その中には今も、あの一人が気を失っていることを願いたい。）さつさと洞窟の入り口のことだけを考えて通り過ぎた。

「……どうやら、吹雪は収まつたようだね？」

「…………長かったな…………」うんな意味で……

洞窟の外には晴天が広がつてあり、雪が降つたよつな後など、これっぽちも見当たらなかつた。後ろを向くと、未だに水晶の洞窟が残つており、今までの経験が嘘ではなかつたことを静かに物語つていゐ。

ギヤアアアアアアーーー！

「と、つむやぐ、物語つてこる。まあ、俺がこんな危険などいろに戻つてくることなんてそういうことと思つけどな。

目覚め

十、

一日ほど、俺たちは行方不明だつたらしく……俺たちが帰つてきたことを知つた葵たちは泣いて喜んでくれた。まあ、帰つてたといつても下山している途中で葵達と会つただけだが……葵たちが来る前に、俺は黒河に龍の話をしておいたのであつた。

「……また、どこかにだまつて行くんじゃないかと思つてましたよ?」

「そうよ、どれだけ私たちが心配したか分かつてるの?」

「これはまた、お仕置きが必要かもしませんね?」

三人に俺一人だけが起こられている間……黒河は一人、今まで起こつたことを考へているようでもあつた。

「……暗兄様! お怪我はありませんか! ……」

そんな時、どこかで見た一人の美少女が黒河のもとに走つてやつてきた。……その顔は、水晶の洞窟であつたあの一人にそっくりであつた。え、あの一人つて黒河の妹たちだつたのかと思ったが……・・どうやら、黒河の田を見ると違うようだ。

「……し、白川……。」

何か言いたげな奴の顔……見るだけで分かるが、こんな二人の妹など、僕は知らないといつていいようだつた。……いつから、

ミステリーになつたんだ? いつの間に、奴に妹なんてできたんだ?
そして、ほんとにいたとしても何であんなにあいつの妹は両方とも、
可愛いんだ? 誰か、教えてくれえ!!

「ま、これも何かの運命……黒河、よかつたな……神様がもて
ないお前にプレゼントしてくれたんじゃないのか?」

「ちよ、何言つてんだよー僕は出来れば年上、もしくは同年代が好
みなんだよー……」

突つ込むといひはそこかと思ひながらも、誰にこんな不思議な経
験を話せばいいかぜんぜん、分からなかつた。ううむ……、困つ
たものだな。黒河はいきなりできた謎の妹たちに好き好き光線を当
てられてまいつている。

「輝さん、顔色悪いんですけど……大丈夫ですか?」

「え、ああ……ひょっと色々あつて疲れたんじゃないかな?」

加奈と禮ちゃんは俺と黒河のために何かジュースを買いに行つたよ
うだ。葵が言つには、もう少しで黒河の家のものが迎えに来てくれ
るらしい。

「ほんと、私のお姉ちゃんも心配してたんですよ?」

「ああ、そりゃ……謝つておかないとな……?」

お姉ちゃん? 葵にお姉ちゃんなんていただろつか? いや、いなか
つた。断じていなかつた……なんとなく、嫌な予感がして、
黒河のほうを見た。黒河も、謎の妹たちに抱きつかれながらも、葵

に姉がないことに気がついて水晶の洞窟の奥であつたことを思い出して何かに気がついたらしい……。

「……黒河、海で見たものを覚えてるか？」

「うん……あれってもしかしてだけど……蛇じゃなくて、龍？」

「お、一人とも見つかったんだねえ、私、心配しちゃたぞ？」

黒河とともに、回らない首を無理やり動かし、声がしたぼうにまわす。と、そこには葵に似ている女性が手を腰のところに当てて立っていた。もちろん、俺はこんな女性を見たことないし、黒河だってこいつに呼んだ覚えはないはずだ。

「白川、よかつたな……綺麗なお姉さんが心配してくれて……」

「黒河、その言葉、お姉さんを妹に代えてそのまま返すぜ？」

葵の姉だといった、その人物は俺の耳元でこいつ囁いた。

「……こんな綺麗なお姉さんから逃げちゃ駄目じゃない？ 輝君？」

にやりと笑う、その顔は……妖艶の感じで怖かった。しかし、こんなところで震えていたつて始まらない。

「……今度、話したいことがありますので、どこかに行きませんか……ええっと……」

「名前は藍よ。藍姉さんといつものように呼んで構わないわ。」

どうやら、この人が何者かは分からぬが……話せる相手ができるのは事実のようだ。いつたい、俺たちが経験したあれは何だったのだろうか？そして、一人、蚊帳の外であつた葵は不満そうであつた。

「むう、お姉さんと輝さんってそんなに仲が良かつたんですね？」

「葵、大丈夫よ……私はあなたを応援してるからね。」

別れ際、彼女は俺に携帯番号のアドレスを渡してどこかに去つていった。黒河は妹たちにいまだにじやれ付かれており、いきなりできてしまつた妹たちにどうやって接すればいいかわからずになすがままにされていた。まあ、かく言つ俺もさつきから葵に後ろから抱きしめられているのだが……。

「葵、どうかしたのか？」

「……他の人とされたらたまりませんので、予約しているんです。」

「……………ですか。それで、それは何の予約でしょうか？さつきから、腕に力がこもつているような感じがするのですが？あ、あれ？なんかまた、寒くなつてくるような……。」

「……輝さん、起きてください……風邪引きますよ？」

「ふえ？」

俺は自分の部屋に突っ伏して寝ていた。じつやら、今まで夢を見ていたようだ・・・そう、自分の部屋でクーラーの温度を下げるだけ下げる寝ていれば誰だってこうなるだろ？

「・・・輝さん、旅行はどこに行くか決ましたんですか？」

そうだった、俺は今、みんなで行く旅行を探していく、寝てしまつたようだ。俺が見ている本には山の風景が映し出されており、その隣にはちょっとH・ツ・チな本がおいている。

「あ、黒河さんからお電話がありましたよ？なんでも、旅行にいっしょにこいつだとか？」

俺は、背筋が寒くなる感じがした。夢のよつてなるのはいやだね。

田覚め（後書き）

えーと、輝が見ていた不思議な夢話は一回だけで終わりです。出来たら、感想を聞かせてください。

十一、
俺たちは、黒河のお誘いにより、夏の海にやつてきた。……はじめは奴の別荘の山に行くはずだったのだが、俺が無理を言つて変えてもらつた。

「……白川、暇だな。」

「ああ、そうだな。」

そして、俺たちはパラソルの下であまり密のいない浜辺を眺める。どうやら、くるのが早かつたようで、水着のお姉さんたちの姿はほとんどない。ああ、眺めるもんがねえのはかなりきついな。

「……白川、葵ちゃんたちはまだ着替え中か?」

「そうじゃないか? そういえば、お前のほうも誰かが遅れてくるって言つてなかつたか?」

「……あまり期待しないほうがいいよ。さて、僕たちは先に砂のお城でも作つてますかね?」

まあ、三人の水着姿は後のお楽しみとして、今はこいつと寂しく、砂の豪邸を建ててやるか・・・・後でそこからかにでも捕まえてくるか・・・・。

砂の城の耐震強度を確かめている途中から、人が増えてきた。中には、見た目完璧の水着、ギャルも多くいる。

「輝さん、どうですかっ！…」

そして、葵が水着をまとつて姿を現した。・・・・・。

「葵、似合つてゐるぞ。うん、實にいい。」

「そうだね、僕としてはこれのために海に来る男だからね・・・・・まあ、ちょっと露出度が少ないのが僕としては残念だ。」

「輝さん、砂のお城ができたら海に入つてきてくださいね？」

そういうて、葵はエンジン全開で海に突進して行った。まあ、彼女が起こした地震によつて、俺たちの城は半分崩壊してしまつたがな・・・・・ちょっと、水をかけすぎたか？と、俺が砂を再び集めなおしていると、誰かの足が俺の目の前に現れた。

「・・・・・ 加奈か。」

「・・・・・ 輝、早く泳げりよ？」

下から加奈を見上げる感じで加奈の姿を確認する。・・・・・ス、スクミズだとお！…

「・・・・・ 白川、何かいつてやれよ・・・・・ 期待していふよつな田で君を見ているぞ？」「

黒河は俺のほうを意味ありげな視線で見てゐる。・・・お、おい・・・で、でも・・・こんなもんはどんな風にほめてやればいいんだ？俺としては加奈には何も期待していないぞ？と、とにかく・・・何か言つてやらないといけないな・・・・・。

「と、とつじも・・・ロココンヒルアラガレソウナキユートな格好をしているな、加奈・・・俺としてはもっと普通の水着にしたほうがいいと思つぞ?」

加奈はちゅうと考えるような仕草をして、頷いてくれた。・・・よかつた、怒らないで・・・。きっとここで暴れられたら水もあるから効果は抜群つて奴だな。

「輝、じゃあ、先に行つてるよ?」

「ああ、もうちょっとで砂の城もできるから、それができたら俺も黒河も海に泳ぎに行くからな。」

そういって、加奈は葵のもとに走つていった。そんな後姿を黒河は思いつめたよつて青色のため息をついた。

「・・・黒河、もしかして加奈にでも氣があるのか?」

そんなことをふと、黒河に聞いてみたが・・・奴はくらべい顔で答えた。

「・・・いやね、僕としては遠慮願いたいな・・・妹系は僕の守備範囲外だよ・・・距離として、冥王星から太陽までの距離はざつとあるな・・・」

そんなことを言つ黒河の姿はなんだか、かわいそうであった。なんか聞いて罪悪感を覚えてしまつた。

「・・・輝君、似合つかな?」

さて、暗い気持ちを切り替えてくれる、本年度の本命がきました
あ！！白衣の天使といつても過言ではない、俺のお姉さんの存在、
碧さん！！

辺りの連中は碧さんをちらちら見てゐる。しかし、見るんじやねえ！減るじゃねえか！

「うむ、完璧だな・・・白川、今年はいいものを見せてもらつたよ。」

「ああ、そうだな・・・碧さん、ありがとうございました。」

「いえいえ、こちらこそや・・・輝君、私も先に海で泳いでくるよ。」

「ええ、ぜひとも行かせてもらいます。」

そういうて、碧さんも葵たちのもとに向かっていったのであつた。
・・・行くときに俺たちの砂の城を粉碎して行つてしまつたが、ま
あ、見物料と思えば安いものだ。さて、俺もそろそろ泳ぎに行くと
するかね？

「・・・・黒河、そろそろ泳ぎに行かないか・・?どうした、なん
か化け物でも見る目になつてるぞ?」

黒河の田は先ほど、葵達が出てきたシャワー室に固定されており、膝はがくがくとなっている。

「あ・・・あああああうわあああ！」

黒河はべたんと砂浜にしづらをつにしてしまった。と、シャワー室から一つの影が現れてこっちに猛然とダッシュしてきている。す、砂煙が上がってるぅ！――

「「暗おこなせまあ――」」

俺の田はとてもいい。そして、俺の田は夢に出てきていたあの一人がこっちに黒い水着をまとって走ってきてることが分かる。まあ、夢の中と違うのは髪の毛が黒色と、まだ全体的に色々と幼いといつーことだ。

「・・・白川あ、どうしようっ――腰が砕けちゃったよお・・・」

本当に、腰が砕けてしまったのだろう・・・黒河はしづらをついた状態のまま俺に助けを求めてきてる。・・・いや、困つたな・・・・・。

波

十一、どうすることもできない・・・俺は、そういうことがあるとをはじめて知った。俺の目の前では、双子の姉妹であろう、彼女たちによつて黒河が俺の目の前から消えてしまった。

「し、白川あ、助けてくれえ！–貪乳たちの相手をするのは僕はいやだあああ！–へるふみー、えすおーえす！–」

「まあ、暗おにじさまつたら、恥ずかしがりやなんだから・・・。」

「そうですね、慣れれば大丈夫です、慣れは人を強くします。」

「ああ、黒河、お前が何で加奈を見ていたか分かつたよ。・・・すまん、俺には何もしてやれることはない。」

「逃げるのかつ、白川あー！」

「さらばだ、あとは三人でいちゃいちゃデモして時間を過ごしていくれ。」

俺は、黒河を見捨てて夏の海に向かつて走り出した。後ろからは黒河の叫び声が聞こえてくる。まあ、よかつたじやないか、俺には関係ないもんねえ！

「輝さん！–ほおらー！」

海に入つて恒例・・・水の掛け合い・・・だが、葵が相手だとそ

う入つてられない」とこいつ」ことを俺は知つてしまつた。

「ちよ、な、何で津波が・・・がばがばがば・・・

葵が水を俺にかけようとする、すさまじい水流が発生し、それはあつという間に俺の頭よりちょっと大きい波となつて俺を襲つたのであつた。うづ、海の水つてしまつぱにや・・・まるで、涙の味だぜ・・・。

「ぐ、ぐわおーーー」んなとこりで泣いてるや、男がすたるぜーーー。

「・・・・・もともと、女子に話しかけられたことなんて皆無の輝が言ひ台詞？」

ぐ・・・・加奈の指摘も鋭いが、俺としてはそんなことで負けるつもりはない！！

「・・・・・ならま、男対女で三種目勝負だーーー

「ああ、おもしろいですね、輝君、やりますよ。」

さて、男チームのチームメンバーは俺と黒河・・・・・ただ、それだけである。女チームは葵、加奈、黒河の従姉妹の早紀さきと奈木なきである。審判は碧さんだ。そして、気になる種目はすいかわりどビー・チバレー、フラッグが立つているところまでの競争である。

「・・・・・では、すいかわりは男チームの先手をお願いします。なお、すいかの数が足りないので先にわつたほうの勝ちとなります。」

「黒河、がんばってこいやーーー。」

「ああ、任せとおいてくれ。」

田嶋しをして、ぐるぐる回つ、出撃……そのままひっかかって走つて
あて・・・

「せいやあああーー！」

「うょ、それはおれだあーーのわっちーー！」

俺は振り落とされた木刀（俺が護身用に持つてきた）を受け止め
る。あ、はじめっから負ければよかつたなあ・・・。

「・・・ええ、男チームは見事仲間割れとなつたので、次は女
チームです。」

「加奈ちゃん、がんばってえーー！」

「「がんばってください、加奈さんーー！」

「まつかせておこへーー！」

そして加奈は黒河と同じように回つ、スイカの方向にきちんと進
んでいく。

「・・・白川、」のままじや負けちゃうよ~。

「まあ、どうせ加奈の事だからそりゃくとでこけるんじゃないかな?」

思つたとおり、加奈は俺たちが先ほどまで作つていた砂のお城（

既に原形をとどめていない。）にひつかかり、こけた。スイカまではまだちょっと距離がある。だが、俺の予想を超えてしまった。

バシーンー！

雷が落ちたような音がして、皆はこけた加奈から音がしたほうに目を向けた。

「…………」

そこには、黒焦げになつて二つに分かれた元スイカが存在していたのであつた。

「…………まあ、スイカが分かれたから、女チームの勝ちです。」

「…………ありか？」

「まあ、ハンデと思えばいいんじゃない？」

俺はとりあえず、こけた加奈を起こしに行つた。未だに、こけたまんまである。念のため、救急箱を持って出動。

「…………加奈、大丈夫か？」

「…………まあ、鼻をすりむいただけよ。心配ないわ。」

「…………まあ、念のため、消毒だけはしておくれからな。」

俺は座つて加奈の低い鼻に消毒をして、絆創膏を貼つてやつた。

「あ、ありがと・・・。」

「ま、なんにせよ、俺たちはピンチだな・・・。加奈はあっちで座つてみてな。」

俺の言葉に加奈は珍しく、したがつて碧さんの所に向かつたのであつた。

「さて、次はビーチバレーだつたな・・・。」

相手は既に準備万端らしい・・・敵は黒河の従妹達だ。

「行くぞ、黒河！震えてんじやねえ！――」

嫌がる奴を俺は引っ張つてバトルフィールドまで連れて行つたのであつた。

十三、
相手は双子なので、きっと凄い連携の数々を繰り出してくるに違いない。よし、こちらも友情パワーとやらを見せてやるうじやねえか。

「「いくぞ、相方！…返事しろ…！」」

一人で綺麗にはもつた。…。…。…。…。…。…。…。…。
い気持ちは黒河の奴も持っているらしい…。

「さ、いきますわよ、お兄様方…。…。」

サーブ権はあちらから…。…。ちなみに、三十一点先制で勝利となる。さて、がんばりますかね？

「…。…。お兄様私の愛をつけとつてえ！…！」

兄愛ぶりを早紀？いや、奈木かな？俺にはどちらがどっちかさっぱりわからん。まあ、とりあえず、双子の片方が兄愛ぶりを本人（黒河）に思いつきりぶつけるためにモーションに入った。…。…。…。
バレーボールにハート型のオーラが出ているのは俺の目がおかしくなったからか？

「…。…。ロック、オン！食らえ、『兄愛魂』！…！」

ボールは黒河めがけて飛んでいく。

「黒河、あれを受け止めて俺の頭上に上げろーー！」

「ひいいいーー怖いよおーー！」

黒河はその場にへたり込み、身を震わしている。・・・・・駄目じやん。まあ、そんな黒河だったが、頭で直撃を受け、後方に吹っ飛んでしまった。だが、ボールはちょうど頭でバウンドし、俺の頭上にやつてきた。よつしゃあ尊い犠牲だったが・・・・これはこれでラッキー！

「そりゃあーー！」

ボールは綺麗に相手方の真ん中に落下。急いで一人は反応するも、ボールが地面に着地するほつが早かつた。

「やつたぞ、黒河ーー先制点だー！」

俺は振り返つて黒河を見る。・・・・・と、黒河はいつの間に作つたのだろうか・・・・砂の城壁の後ろに隠れこんでいる。・・・・どうやら、妹発作にかかつたらしく・・・・井、しうづがない。

「ええと、先ほど、サーブを打つたほつはどうだっちだ？」

「え、私だよ。」

俺は、サーブを打つたほつに黒河を迎えて行かせた。まあ、直撃させたのはあやまるから、早く戻つてきて欲しい・・・・双子の方は、俺にそういうわれるとうなずいて砂の城壁を乗り越えていった。

「う、うわあああーー！」

そんな声が少し、聞こえた気がする。まあ、ここからみてみると、黒河が四つんばいになつて逃げている姿が切れに見える。ああ、悲しいかな？四つんばいの状態では砂の城壁を越えることができない。追い詰められてしまつた黒河、どうする？「と、こんな」とはどちらでもいい。

「審判、選手交代！黒河から・・・誰か、暇な人をお願いできますか？」

「認めましょ。黒河選手と早紀選手は怪我のため、交代といつことで・・・黒河君の代わりに私が入ります。先さんの代わりは加奈さんが入つてください。」

後ろからギヤーといつ声が聞こえて気がした・・・残つた双子のほうも走り出し、砂の城壁に侵入。・・・。

「審判、葵を加奈のほうに入れてくれ。お願いします。」

双子が消えてしまつたのをため息をつきながら見ていた碧さんは加奈の隣に葵を選手として入れ込んだ。さて、試合再開。

「碧さんはサポートに回つてください、俺が何とかしますー。」

「わかつたわ、輝君。サーブ権はうちだだから、私が打つわね？」

俺は頷き、相手を見やる。さて、この一人の実力はいかほどのだろうか？ぼさつとしているど、後頭部にすさまじい衝撃が襲つてきた。

「『』めん、失敗しちやつた！」

そつ、碧さんが撃つたボールは直線状にある俺の頭に直撃。・・・葉っぱが数枚、俺の体に刺さっているのを確認。な、なんじやこりや・・・。

「さて、もう一回打てるよね？碧、いつきまあーすーー！」

今度はあたらないよつて脇にそれで後ろを見ることにした。うむ、これでとつやの反応ができるよつになつた。

「・・・『縁の風』！..」

すさまじい風が吹き荒れ、新縁の葉をまとつたボールは相手側の陣地に侵入。しかし、それを難なく打ち返す加奈・・・。腕には紫電が見える。おいおい、何をする氣だ？

「・・・『紫電一閃』！..」

お互い、もはや人間離れの技を連発し・・・。ギャラリーが増えてきた・・・俺はちょっと忘れていたが・・・『』につけらは龍だつたね。なんだか、俺だけ置き去りを食らつた氣分だ。まあ、そんなこんなで、こちら、三十点、あつち、一十九点。あと、一点でこちらの勝ちだ。そして、運命の対決は始まつた。サーブ権はこちらにあるので有利とおもわれる・・・もつとも、碧さんが打てばの話だが・・・。

「がんばってね、輝君。ほら、黒河くんの敵をとるのよ？」

「ええ、わかつてます。・・・そおれーー！」

俺は普通にボールを打ち上げ、相手陣地へと侵入させる。もう少しで、着陸だったのだが、葵がそれを拾い上げる。高く上がったボールを加奈が電撃をまとった右腕で打ち込もうとする。

「・・・させらかあーーー！」

俺は飛び上がってそれを防ぐとして、あせつた。今頃あせつてもどうしようもなかつたが・・・・・加奈の手は止まらない。振り落とされたボールはありえない光を放ちながら俺の顔に直撃・・・・・その衝撃で俺は後方に吹っ飛ばされたが碧さんが受け止めてくれた。ボールは相手の陣地だ。どうやら、勝つたらしい。

夏の夜空

十四、

一対一の引き分けのまま、男VS女の戦いは終了を迎えた。最終局面……俺対葵となつた。黒河はあつちで双子たちと仲良く寝ている。ま、しょうがない奴だ、これは罰ゲームとでも思つてくれたまえ……さて、次のルールは簡単……海の上にある旗まで泳いだほうの勝ちである。葵がどうかは知らないが……俺は意外と泳ぐのは得意だ。

「位置についてえ、よーい、どんづ！――」

審判の声に合わせて俺と葵はいつせいにスタートを切る。
と、いきなりだが……あつという間に葵に先を越されてしまった……。

え、あれって反則じゃない？人間の形してないじゃん！！あれってなんていうか知つてる？龍だよ、龍！葵はいつの間にか龍の姿になつて泳いでいた……俺のときと違つてかなり泳ぐのは早い……。そして、一度も息継ぎをせずに、旗のところでストップ。水中から葵が顔を出す。その顔は既に人間に戻つていた。俺は、未だに半分も行つていない……。葵は呆然としている俺のところまで戻つてくると……笑つていつた。

「どうですか、輝さん。負けを認めます？」

「…………」

いや、これは……なんだ？自分がエースパイロットだと思つていたら、実はへぼパイロットだったという奴か？もしくは、セン

サーに気がついて後ろを向く。「うとしたら胴体を持つていがれちまつた悲しいパイロットか？」

俺がそんな感じで固まっていると・・・葵は俺のほっぺたを両手で引っ張った。

「・・・輝さん、あまりのショックでおかしくなりましたか？」

「ひ、ひや・・・わははつた。・・・負けを認めるよ。俺たちの負けだ。」

一人、既に負けている奴もいるが・・・それはしじうがない。

「じゃあ、罰ゲームは一人ひとりの要求を受け入れるということですよね？」

「ああ、煮るなり焼くなり好きにしてくれ・・・。」

もつとも、ザリガニを煮るなり焼くなりで出されたらさすがにそれは食べれんがな・・・。そもそも、口も落ちかけてきた。俺は葵と一緒に泳いで皆が待っているところまで戻ることにした。

「輝君、あつさつ負けちゃったね？」

「輝、おつそーい！！」

「・・・へつ、どうせ俺は遅いですよー！」

加奈たち、不平たらたら、俺、心の中で泣いてます。葵は結構ある胸をそらしてすんごく、嬉しそうだ・・・。へ、俺に勝つたぐらいでそんなに嬉しそうにするんじやねえ！・・・と思っていたのだが、

葵はすねている俺の片手を握つて言った。既に、他の皆は俺を置いて帰り始めた。

「これも、輝さんおかげですよ?」

「は?」

そういうにて葵は俺を再び置き去りにしてみんなの後をあつていつた。・・・・どういう意味だらうか?俺はまじめに泳いだつもりだ・・・まあ、三メートルぐらいしか泳ぎきれなかつたけどな。しかし、今はそんなことを考えている場合ではない。置き去りにされでは大変だと俺はみんなの後を追つことにした。

『せいやあああー!』

そんな声が聞こえた気がして、俺は後ろを振り返つた。海は相変わらず、波を運んでいるだけだし、輝いていた太陽は今では夕日になつてゐる。どこにも、おかしいところはない。

「?」

俺は氣のせいだと思い込むことにじり、急いでみんなのあとを追つことにした。

豪華な夕食後、黒河とともに海が見える露天風呂に入ることとなつた。

しかし、俺はちょっと遅れてしまつた。そして、男風呂のほうには(黒河の別荘には女と男とそれ別にしてある。なんでも、冬は旅館として機能するそうだ。) 女物服が置いてあつた。どうやら、あの双子が黒河と一緒に入つてゐるらしい。・・・。俺は思い直して

叫び声が聞こえてくる露天風呂を後にした……。

「…………はあ。」

既に暗くなつた海岸で俺は一人、ため息をついた。……自分で言つのもなんだが……男が一人で海岸にいても失恋したと思われるに違ひない。そんなことを考えて自己嫌悪していると……。

「輝さん、どうかしたんですか？」

葵が俺の隣にやつてきた。まだ、風呂に入つていないうらしい……。
「あ、ちよつどこいや、聞きたいこともあつたし……。

「葵、何でお前は俺に勝つたときに俺のおかげだつて言つたんだ？」

俺の問いかけに葵はちょっと驚いたような感じで俺の顔を覗き込んだ。

「あ、覚えてたんですね……簡単なことです、私は……輝さんが死んでしまつた後、輝さんが習つていた拳法を習い始めたんです。それで……修行の一環として、龍に戻つて泳ぐ方法を身につけたんですよ……。それで……。」

続きを言おうとしたが、葵は涙を流し始め、言葉を出さないと話しきなかつた。え、何で泣いてんだ？

「…………お、おい・・・葵、大丈夫か？」

しかし、返答は帰つてこはず、帰つてきたのは葵のタックルであつた。

「毎日が・・・毎日が不安でたまりませんでしたー輝さんを・・・忘れてくなかったんですー絶対に！私は・・・私は・・・」

俺は無言で葵を抱きしめようとしたが・・・。

「あ、葵さんが泣いてるー！輝、何、泣かしてるのでー。」

「あらあら、いけませんね、輝君は・・・。」

加奈と鶴さんがやつてきてしまったので俺のひとから勇氣も吹き飛んでしまった・・・。アンパンン、僕に勇気を一ダースほど分けてくれ・・・。

葵は、俺の胸から顔を上げ、夜空を見上げて呟いた・・・。

「輝さん、宇宙に、龍っていますかね？」

俺は肩を竦めて星が光っている空を加奈や鶴さん、そして葵と一緒に見上げた。

夏の夜空（後書き）

ええっと、ちょっと今回の話の終わりかたは綺麗だったなあと自画自賛しています。まあ、それはいいとして・・・今の所は話に急転回がないなあと思っていますのでどうにかしたいと考えています。たまに、感想を書いていただけると非常に有り難いです。

久々の学校

十五、

長いよつで俺にとつては短かつた夏休みは平和に幕を閉じた。・・・さて、学校にでも行きますかね？夏休み中、俺は毎日、三人によつて、高校の勉強を毎日教えてもらつていた。いきなり一学期の勉強を教えられてもさつぱり分からぬからだ。まあ、それのおかげで何とか理解することができた。

久しぶりに会う連中の顔をまじまじと眺めたりもして、話もした。それなりに夏休み明けとしては活氣のある連中が多かつた。そして、午前中の学校は終わりを告げ、放課後となつた。俺は久しぶりに部室へと向かつたのであつた。

「さて、一学期の途中で輝君がリタイアしてしまつたので、その時点で部活は無期限休部となつてしまつましたが・・・ゴキブリ並みの生命力を持つ輝君が復活できたので、再開したいと思いまあす！－はくしゅーー！」

ぱひぱち・・・

拍手をしているのは自分だけ・・・碧さんはよつやく、気がついたよつだ。顔を傾けて俺の顔を覗き込む。

「輝君、拍手は？一人で拍手をするのは寂しいよ。」

「・・・いや、俺が拍手したとしても一人しかもとよついませんよ？葵と加奈は先ほど、携帯でおばさんの命令を受け、どこかに行つてしましました。」

碧さんはそれを聞いてうなつたが、近くにあつた書類棚から何かを引っ張り出してきた。・・・・かなり古い、何かの書物であつた。ま、まさか・・・江戸時代の人口本か?・・・いや、そんなもんが学校にあるわけないか。

「碧さん、それなんですか?」

「これはね、この地域に伝わる色々な話を纏め上げたものらしいわ。そつねえ、いわば、この地域の不思議話かしら?」

俺はそれをペラペラとめくつてみることにした。碧さんはそんな俺の隣に立つてじろじろしてくる。

「輝君、久しぶりの一人つきりだね?」

俺は古文書?に意識がいつていてるので適当に返事をしてしまった。

「ええ、確かにそつですね・・・・・まあ、色々と大変でしたから・・・」

その瞬間、俺は横からの衝撃にふらつとなつた。

「み、碧さん?何をしていろんですか?」

「・・・・輝君が適当に返事するからだよ。お姉さん、泣いちゃうよ~」

え、何?俺が悪者?こんなところを加奈に見られたら再び何かを言われるに違いない。俺はあたふたしながらもじつすれば一番いかを考えてみた。

「わ、悪かったです。自分が悪いと思っています！－！」

「本当ですか？」

「ええ、俺の目を見れば嘘を言っているかいないか、絶対に分かります。」

俺はやつこつて碧さんとの目を見据えた。あっちも真剣な目で俺を見てくる。その目が段々、大きくなってきてると俺が気がついたときには後の祭りだった。

「むぎゅうひへー」

そう、俺の目が碧さんの目以外を見ることができなくなるぐらいに接近してしまっていたのだ。当然・・・・くつついてしまった。

俺は急いで碧さんから離れた。

「・・・え？ええ？・・・えええええええ？」

「輝君、意外と強引なのね？」

顔をポツと朱に染める碧さん。あ、その表情も可憐だなと思つている場合じゃない。あわわわわわ・・・。

「じ、事故ですよね？これって事故ですよね？」

「いえ、当た逃げかな？輝君、ちよつといつに来てくれないかな？」

その目は何かを狙つてゐるような顔だつた。あ、そんな意地悪そうな顔も素敵だ・・・つて、そんなことを考へてゐる場合じやない！

「ほり、早く来ないと一人に言つひやうだ？」

「わ、わかりました。無抵抗です。両手を挙げてそちらに行きます！…投降します！…白旗です！…」

俺は両手を上げて不適に笑つ碧さんのもとに向かつたのであつた。うう、食われそうな雰囲気だ。あ、そつそつ、食われるで思い出しあけど・・・それなら今日の朝のうちに大好きなプリンをさつと食べておけばよかつた・・・今頃、おばさんか加奈に食われてしまつただろうな・・・。あ、そついえば昨日も俺のイチゴプリンを食べた奴がいるんだよなあ。昨日はそれで加奈と喧嘩になつたっけ？

「輝君、もう一つ聞いておきたいことがあります。」

「なんですか？」

俺は正直、怖かった。・・・復活記念に黒河からもらつたあの本が、あつさりと見つかってしまったのではないかと思つたからだ。

「・・・・・一度と、私の前から姿を消さないで？約束よ？」

いつものような天然系のぽけーつとした声ではなく、少し、思いつめたような感じの声だつた。俺は伏せていた顔を上げて碧さんの顔を驚いてみる。だが、それもできなかつた・・・。碧さんは再び、俺を抱きしめたからだ。俺のほっぺたがかすかにぬれているのは誰かの涙だろうか？少しの間、碧さんは俺にしがみついて離れなかつ

た。

「・・・・輝君、責めるなら、私を責めてね？きっと、一番悪いのは私なのよ・・・。あなたが大切に取つておいたイチゴプリンを食べたのも私。そして、今日・・・悪いけど・・あなたのプリンを食べてしまつたわ。」

え、何？鶴さんは何をいつているんだ？プリンを食べた？ついでに俺も食べる氣か？こんなに疑問文を並べる俺の頭の中にははてなが三十五体ぐらい群れをなして現れた。

「・・・・輝君、悪いけど・・・私にちよつとついてきてくれないかな？あなたに話しておきたいことがあるの。」

ついてきてと言ひながら、俺の体を抱えるよつとして連れ去つていぐ・・・。え、食べるなら場所もかんがえるべきということか？そして、俺は人気の少ない校舎裏に連れて行かれたのであつた。

ねじへひやん！

十六、
校庭ではソフト部、野球部、陸上部などがそれぞれ青春を謳歌している。そんな中、俺と碧さんは連れ立つて校舎裏へとやってきたのであった。

「…………まあ、ここなら良こそでしょ、ハ。」

「一体、如何したんですか？」

碧さんは愛用の白衣の右ポケットから何かを取り出した。それは、一通の手紙に見えた。が、まさか……生徒からのラブレター？

「…………輝君、実は貴方に行つてもらいたいことがあります。」

「…………何處ですか？」

『ひやり、』の手紙を書いたのは碧さんで、その書いた手紙を俺に持つていつてもらいいたいことがあります。

「…………『聖地』です。」

「…………はい、』

俺は聞きなれない単語を耳にしてちょっと困惑った。

「…………龍の聖地に行つてもらいたいんです。」

「はあ、成る程……」「」から遠いんですか？」

碧さんは首を振って話し始めた。

「……きっと輝君なら何度も行つたことがあると思います。」

ふと、思つたのだが、手紙なら郵便局にでも持つていけばいいんじやないのだろうか？

「…………ですか？覚えていませんが……分かりました。で、誰にこの手紙を渡してくれば良いんですか？」

「うう俺が聞くと、碧さんは俺を指差して言つた。

「貴方のおじこさんです。」

「え？」

俺がそのよつて采けて碧さんに質問しようとしたが……質問できなかつた。何故なら……碧さんがばあちゃんが俺を爺さんのところに送つた時の技の格好をしたからだ。や、やばい……殺される……必死に避けようとしたが……見事俺はその攻撃を食らつて意識を『聖地』に送り込んだのであつた……。

俺が田を覚ますと……何処かの山の中であつた。

「……。」

見渡してみると、木々が邪魔をしてみることが出来ない。

逆立ちしてみたが、特に何もなかつた。そして、もう一つ気がついたが・・・・・どうやら俺はパンツ一ぢよらしい。しかも、真っ白のトランクスだ・・・・・叫んで助けを求めるみたいがこの格好を誰かに見られたら嫌だ。それに、既に俺は死んでいるみたいなので・・・・今ごろはずかしむことはないと思つんだが・・・まあ、もしもの時の為だ。

「お、輝じゃないか・・・・どうした、パンツしか履いてないよう見えれるが？」

ナイスタイミングで俺の目の前に現れたのは私のおじい様であつた。あつちもあつちで何だか・・・・変な格好をしている。いや、富司さんか・・・・確か俺の爺さんの職業は違つたと思うんだが・・・まあ、それはさておき、碧さんに渡された手紙を爺さんに渡そう。

「爺さん、碧さんつて人からの手紙だ。」

俺はパンツの中に挟まつっていた手紙を爺さんに渡そうとしたが、爺さんは受け取ろうとしなかつた。そりやそつか、男のパンツの中に入つていた手紙だもんな。

「・・・・輝よ、その碧さんといつ人は別嬪さんか？」

「あ、ああ・・・・綺麗な人だけど?」

「ひへ、見ていてぐつとくる人か?夏の浜辺にマッチした・・・・そんな人が?」

俺はなぜこんなことを聞くか分からなかつたが、一応、正直に答えておいた。

「ああ、完璧だと思つたが……。」

「やうか、そつか……なら、手紙をもらおうじゃないか。」

俺は思ひ、まさかこの爺さん、男や加奈みたいな奴からの手紙は受け取らないのではないだろ？ 爺さんは碧さんからの手紙をまるで初めてラブレターをもらつ男みたいな感じで読んでいたが……。途中からあんまり興味のなさそうな顔をし始め、最後のほうは俺を睨んでいた。な、なんだ……この迫力は？

「ちえ、お前のことを頼むとしか書かれておらん。ふん、だ。まあ、しうがない。輝、じつちにおいで。」

「わ、分かつたよ……で、爺さん、菜々美は元気にしているか？」

俺は話を変えようと爺さんに話したが……爺さんは更に俺を睨んできた。え、なんか俺つて悪いことした？

「……菜々美は……お前さんがいなくなつて数日は泣いておったがの……でも、今は……。」

そこで爺さんは言葉を切つて前を歩き始めた。え、何？ なんかとつても不吉な予感がするんだが……。しかし、爺さんは突然止まるとい、俺をひたと見据えて告げた。

「……菜々美はな、天国に……」

そこまで聞いて俺は膝が地面についた感覚を覚えた。とつとつ、成仏しちゃつたか……。

「・・・・天国に嫁に行つてしまつた。」

「・・・・は？」

爺さんはその後、俺の前で色々と話してくれた。何でも、閻魔様の息子さんのお嫁さんになつたらしい・・・。ああ、お兄ちゃんより先に結婚しちゃうなんて・・・。

「・・・・だがな、輝よ・・・・独りになつていいい事はあるもんじや。よく考えてみたら独身のほうがいいかもしれん。ふつふつふつふ。」

あ、それはいい考え方かもしれないなあ・・・。

十七、

「この前、爺さんが住んでいた屋敷はかなり静かであった。しかし、どうやら爺さんが毎日掃除しているらしく、意外と綺麗であった。まあ、菜々美が消えてしまっていたので少しばかり静かなのが気がかりだが……。

「……輝、畠さんからの手紙によると……どうやらお前を苦しいたびに送り出さないといけないようだ。」

「はつきつ言おひ、俺は既に苦しい思いをしてここまでやってきてる。これで何回田だと思つていいのだらうか？」

「……この山を下山すると、町がある。この前わしも知ったのだが……どうやらここは様々な生物が生きてこらへり……なんでも、天国にやつて來てこる天使などはこの世界の出身らしきのじやよ。」

「……成る程、ここには龍以外の生命体もいるのか……他多数つてこいつ意味だつたのね？」

爺さんは立ち上がりつて何処かにいくと……何かを引っ張つてきた。めちゃくちゃ大きな箱であった。

「この前、お前宛に送られてきたものじや。何でも、何処かの実験室を使って輝のおかげで何かを作れたといつておつたぞ。」

そんなことを俺がしたのだろうか? とりあえず俺は箱の隣にある

手紙を読んでみると、ことにした。

「・・・久しぶりだな、こそ泥君。あの田、私は君のおかげで全てを失つたが、龍の秘密を知ることが出来た。その後、研究に打ち込み、私なりの龍を作り出してみたのだ。神の真似事と罵つても構わないが・・・罵るのはこいつに勝手からにしてもらいたい。尚、それで命を落としても私は保証しないのであしからず・・・」

誰だこれと思つたが、何時だつたか・・・加奈と一緒に何処かに行つたときに博士っぽい奴と戦つたような気がする。まあ、それは別にいいとして・・・。

「・・・・爺さん、その箱を今すぐ焼却炉に捨ててくれ。」

「いいのか？もつたいないと思つが？」

どうせろくなもんが入っていなければ目に見えている。俺はパンドフの箱をあさる気がしないのでね・・・。

爺さんは重そうな箱を抱えて庭に捨て、マッチで火をつけ始めた。
それで、スイッチが入ったのだろうか・・・メカっぽい音がして
箱がいきなり開いた。

箱の中から銀色に光る何かが現れた。・・・なんじやありやあ

! !

「輝、時代はメカかのう?」

爺さんはマッチで火をつけるのをあきらめて俺のところに戻ってきた。そんなことを聞かれても困る。

「・・・輝、がんばれ、あれはお前に反応してこらか?」

赤く光る一つの皿は俺を捕らえているようだ。どこからどう見てもロボットの龍は金属音をきしませて俺に襲い掛かってきたのであった。

「・・・はあ、どうやって戦えって言つんだろ?」

「ほひ、あれじゃ・・・一度思いつきつてほひ?」

多分殴つたら痛いのは俺だ。しかも奴はなんだか色々仕掛けがあるようで・・・口を開けて何かを溜めている。

「・・・輝、今はレーザーとかビームとかそんなもんが主流なんじやろ?」

「ああ、わうりし。・・・爺さん、なりあの龍も口からレーザーなんて吐くかな?」

爺さんは頷いて直に俺を置き去りにして何処かに消えた。そして、残つたのは俺だけとなる。

残された俺に残つた選択肢は一つ・・・特攻だ。

「白川 輝、突貫します!」

言つが早い俺は銀色のボディーが眩しいメカ龍に突撃していく。・・・パンツ一切れで・・・。

「・・・守つたら負けるー攻めろーー。」

俺はパンツの中に何か入っていない確認したが、特に何もなかつたので・・・赤い目に向かつて俺の拳をぶつけてみた。

ぱりいん

あつさつと赤い目は片方つぶれた。しかし、俺の右腕からも血が出ていた。だ、誰か止血をしてくれえ！！

メカ龍は何事もなかつたかのように今度は鱗を俺に飛ばしてくる。え、それって反則じやない？

「へっそうー、いつなつたらヒーリングしてやるーー。」

俺はパンツを脱いでパンツ片手に飛び上がった。どうせ誰も見ていないのだから構わないだろう。それに、碧さんのことだ、何かパンツに仕掛けがあるかもしれない。俺はパンツを光り始めた龍の口の中に押し込んだのであった。俺としては絶対にされたくない。

ぐしゃああああー！！

臭いが聞いたわけではないだろうが、龍は苦しみ始めた。俺の少ない頭では氣体の温度が上がりすぎた為だと思われる。そして、龍は急にまともに喋り始めた。

『・・・後、一分で爆発します・・・』

「え?」

自爆？え、マジで？相手に勝てないからって自爆は良くない。うん、ゲルになんかなつたら駄目だ。

「輝、スタンガンでも使ってその悪戯好きな悪い子を始末してしまえ！」

そういうている爺さんは既にここから姿を確認することは出来ない。爺さんに構っている場合ではないので俺は左腕から・・・人間離れの技を放出した。

「・・・・秘伝、『何で、金髪で背が小さい奴はツインテールが多いんだあ』！！」

それは紫電となつて龍の心臓部分に直撃。直後、メカの動きはぴたりと止まつた。どうやら、爆発阻止は成功したようだ。うん、良かった良かった・・・？メカ龍は体から煙を吹き始めた。え、何？今から再び爆発する気か？

輝への手紙

十八、

煙が辺りからなくなると、そこには何もなかつた。

「ひのやひ、逃げたよひじやな。」

「だから沸いて出てきたのか爺さんは俺の隣でそんなことを言つてこゝ。俺としては再び襲つてこないか非常に氣になる。」

「まあ、そんなことより、早く息を吹き返さないとお前も危ないと思つた?」この前みたいにすうと一いつ切こると火葬される可能性もあるしな・・・。今回はトラブルがあつたことを體せんとやりたい応報告しておいたほうが良さそうじやからな。」

「・・・わうだな。じゃあな、爺さん。」

俺はとりあえず爺さんに右腕を上げて挨拶をした。左手は隠すものがなくなつた股間を抑える役を買つて出でている。

俺は田を開じるとそのまま意識が遠のいていくのを感じた・・・。

目が覚めるとそこは保健室の一つのベッドであった。どうやら、あれから碧さんが死亡届を出さずに保健室に搬送してくれたらしく。・・・よかつた。しかし、近くに誰かがいる気配などない。外はそろそろ夕暮れである・・・。

「・・・帰る。」

一人さびしく俺は下駄箱を開けると・・・そこには何かが入つ

ていた。俺は不思議に想つてそれを取り出して裏返したり口に当ててみたり・・・逆立ちしてみてみたが・・・「、これはまさか・・・

「ア、ラブレタア？」

驚いて声も出せねえ。いや、叫んでいるのだが・・・そ、それにおまかしが本物かどうか分からん。もしかしたら黒河のやつからの悪戯心満載の一品かもしれない。

「お、白川じゃないか？」

しかし、奴は俺の後ろから・・・あれ？以前あつたときよりかなりやせてこる気がするのは気のせいかな？

「黒河、顔色が悪いけどどうかしたか？」

「・・・まあ、僕のことばいいから、君が手に持っているのはなんだい？」

そういうにて俺の手からラブレタア？を取り上げて勝手に開封。

「・・・・今度の日曜日、駅前で1／144ストライク リダムを持つて待つてますう？おいおい、デートのお誘いじゃないか！全く君つて奴は・・・。」

「嘘・・・お前の悪戯心満載の一品じゃないのか、それ？」

黒河は首を振つて俺宛の愛の手紙をくしゃくしゃにして後ろに放り投げた。

「僕の今度の日曜日の予定はだね、あの双子ちゃんのお相手だよ。白川、かわってくれないか？」

「却下。お前を好いてくれるいい双子じゃないか！お幸せにな。」

そういうて俺はくしゃくしゃになつた手紙を大切に胸ポケットの中に入れて黒河の隣を神速で駆け抜け家に帰つたのであつた。これでどんなことがあつても一緒だよ？たとえ狙撃兵から胸を撃たれてもあの世に記念として持つていこう。

「・・・うむ、羨ましい・・・あれ？恋文の欠片かな・・・！なんだ、そんなことか。」

と、黒河の声が聞こえた気がしたが氣のせいだらう。俺は家に帰りつくと誰もいないことを確認してくしゃくしゃになつてしまつた手紙の内容を確認した。黒河が言つたとおりのことしか書かれておらず宛名は不明。誰が出したかは分からぬ。と、そんなことを頭の中で言つていると、加奈が一階から降りてきた。

「輝、顔がにやけてるけどどうかしたの？」

「へへえ、どうかなあ・・・氣のせいだよ。」

なんだか昇天したときのきもちだあ。あははあ・・・。

「うわ、気持ち悪い・・・。」

そういうて加奈は俺の目の前から姿を消してしまつたのであつた。へ、どうせ俺は気持ち悪いですよだーだけど、そんな俺をデート

に誘つてくれる人もいるもんだねえ。夕食時、帰りが遅いおじさん抜きのみんなで夕食をとつていると、おばさんが俺に話しかけてきた。

「輝、今日はなんだか『機嫌だねえ。』

「ええ？ わかります？ 実はですねえ・・・」

「いや、別に聞きたくないから黙つていいわよ。」

加奈がそんなことを言つので俺はこれ見よがしとラブレタアを見せ付けてやつた。しかし、みんなの反応はそれほど驚いていとは思えない。

「へん、ラブレターなんて安い安い。どうせやうくな男たちなんていないからね。」

「そうですねえ、私も結構持つてますし・・・。」

「私もですよ。輝君、そういうのは自慢しないほうがいいですよ。」

碧さんにそういわれたので俺はそれを引っ込めよつとしたが・・・一瞬で黒い墨となつてしまつた。

「・・・加奈、羨ましいからって何も雷落とすことないんじゃないか！」

「ニヤニヤしてるから気持ち悪くなつただけよ。別にひひやまつぶ
なんてない！」

加奈はやついいながら突き出した俺の顔面に右ストレートを繰り出しだった。俺はそれをぎりぎりで避けてそのまま殴り合いに発展・・・・隣の和室でもみ合この喧嘩となつたのであつた。

「輝、胸触らないでよー。」

「ぐ、これが胸だつて？笑わせてくれるわー。」

そして、俺たち抜きの夕食では葵がやけに嬉しそうに夕食を食べていた。それを見ておばさんは言つた。

「葵、よひこへ頼むよー。」

「ええ、任せて置いてくだわ。明日は輝さんと一緒に楽しんできますからね。えへへ、明日が楽しみですねえ。」

輝への手紙（後書き）

何と無く、久しぶりの更新です・・・。それから、新規やらでも出
そつかいや、どうかなあと悩んでいるところです。まあ、出すとし
てもこゆーいやつじゃないと輝達に対抗できない気がしますから・
・。たまに、感想なんかをいただけるとうれしい所存です、ハイ。

デート？

十九、

そして、昨日から見たら今日、明日から見たら昨日がやつてきた！俺はとりあえず駅前に行くことにした。既に手紙がないので予定時間が書かれていなかつた手紙を見ることなく、早めに家を出た。駅前に行つてみると・・・多くの子供連れや俺と同じように待ち合わせをしている連中が結構いた。うつむ、確かに何か目印がないといけないかな？

「・・・おーあれかな？」

俺から見てちょうど右のほうに当たるベンチに目印を持っている女の子がいた。青い服を着ていて帽子をかぶっている。ちょうど防止で顔が隠れているので顔は確認できないが・・・なんだか何とかであつた気がするような感じだ。

「あ、あの・・・君が俺の下駄箱の中にラブレターを入れた人かな？」

「ええ、そうです、輝さん、今日は一日よろしくお願ひしますね？」

顔を上げた女の子は葵であつた。俺は声も出せない。しかし、考えてみたらあの三人の中に犯人がいてもおかしくなかつたかもれない。

「・・・。」

「サプライズですよ。ね、たまには一人で買い物もいいですよ?」

「・・・そりだな。俺の頭の中のほうがおかしかったな・・・。」

「どうせやうり俺は家に帰つて加奈に謝らなこといけないよつだ。それで、これからどうしたものだうか？」

「じゃ、葵、どうへ行く？」

「デパートでお買い物ですね。いや、やつぱり遊園地に行きましょ

そういうて俺の腕に引っ付いてくる葵。いや、意外とこれもいいかもしけん。

遊園地についてとりあえずジムシット「スターに乗る」と決めた。しかし、俺はこういふのは全く駄目だ。怖い。恐い。「いい。

「あたしもお出でにならねえよ。」

俺の断末魔の叫びの隣では歡喜の雄たけびが聞こえてくる。いやあ、田が回る・・・いや、氣絶しそうだ。

「うん、ギブアップだ。」

「一つ目で俺は白旗を揚げた。いや、本当についつのまは無理です。助けてください。」

「そりですか？…なら、観覧車に乗りませんか？」

有無を言わばず葵は俺を引きずつて観覧車に乗せた。因みに言っておくが観覧車も駄目だ。特に、今日みたいに風の強い日にこんなものに乗つたら生きている心地がしない。

「…・輝さん、そんなに近づいて何かエッチなことを考えてません？」

「…・」

俺の口から漏れる本当の恐怖を感じたのか葵は俺の頭に手を乗つけた。

「全く、高所恐怖症だつたんですか？」

「いや、そんなんじやないよ。高いといひは大丈夫。だけど、いひ、揺れる奴は駄目。」

我ながら情けない声を出しながら俺はしつかりと葵にしがみついた。

「…・・・私は輝さんの意外な一面が見れて嬉しいですよ？」

葵はそういって不安顔の俺に微笑んでくれた。少しだけ、心を落ち着かせることが出来た。

観覧車は俺が神様に願つていたからか無事に一周したのであった。隣の葵の顔は頼りがいがあつてほつとする。

「次は何に乗ります？これですか？それともこれ？」

パンフレットを指差す葵だが・・・どれも絶叫マシーンだ。ふ、葵よ・・・俺を仕留めにかかる気だな？

「冗談です、ちょっと休憩しますか？」

「ああ、休憩しよう。」

俺と葵は近くのベンチに座ってクレープを買って食べ始めた。近くではヒーローショウが開催されている。

「・・・葵は遊園地に来るの初めてか？」

「ええ、初めてです。まあ、私が知っているのはあの橋の下ぐらいな物でしたからね。輝さんは何回目ですか？」

俺は葵にそう尋ねられて記憶をたどってみることにした。・・・どうやら、初めてくるようだ。

「俺もはじめてみたいだな。小さいころに行つた記憶が全くない。」

「え、なんですか？輝さんみたいな遊び人なら結構来てるつて思つたんですが・・・。」

遊び人とは失礼な・・・いつ見ても俺は平凡な日々を有意義に使おうと努力しているのだよ。うん、友達に全て彼女がいたんで遊び相手はゲームかおばさんの家で飼つている犬だけだったな。そういえば、犬の姿が見えないけどどうかしたのかな？

「輝さんって、もてないんですか？」

何気なしに葵にそういわれ、俺の心はビームで撃ち抜かれたように深い傷を負つた。

「もてません、これまで女の子と話したことは片手で数えるくらいです。ハイ・・・・。」

俺と葵がそんなことを話しているヒーローショウは佳境にはいつたようだ。悪役が観客の中から誰かを人質にしようと選んでいるあたりを見渡していると誰かに狙いをつけたようだ。少女を一人もステージの上に上げた。

「『きやー、助けてえ！』」「

二十、

その二人は再び、叫び声を上げた。

「『きやーたすけて、兄様！』」

その声に聞き覚えがあつた俺はステージのほうを見た。葵も聞き覚えがあつたのかステージのほうに視線を移す。

「何だ、あの二人か・・・。」

俺の視界に映つたのは黒河好きの双子であった。そして、その双子が見るほうには黒河がこれ見よがしに俺たちを発見して近寄つてくる。

「やあ、偶然だね・・・。白川、葵ちゃんとデートだったのか？」

「へん、お前だつてあの双子じゃねえか。ほら、先程から助けを呼んでいるぞ？」

ステージのほうからは黒河に置き去りを食らつていいる双子がこっちを向いて助けを求めていいる。なんだか本気のようでヒーローも悪人も困つていいるよう俺には見える。どうやら、黒河と一緒にいてもいいことはなさうだ。

「葵、そろそろ次、行こつか？俺たちが邪魔しちゃ悪いよ。」

「・・・そうですね。」

「し、白川・・・僕を見捨てるのかい？」

「見捨てる？ なあに言つてんだ！両方ともお前にぴったりだ。ほら、行って助けてこい。待ちきれなくなつたのかあの一人が凄い業そうしてこっちに走ってきてるぞ？」

俺が冗談でそういうとあわてたあいつはステージのほうを向いた。その隙に俺は葵の手をとつてその場から脱出したのであつた。

「はあはあ・・・」今まで来ればさすがの奴でもついてこれまい。

「まあ、邪魔されたら大変ですからねえ。せつかくのデートですから・・・。」

にこりと笑つた葵の後ろに何処かで見た一人がこっちを見ている。いや、正確に言つなら一人と一匹か？

「輝、鼻の下を伸ばしてるんじゃないよ。」

「ぱつ へぱつ <・・・。」

おばさんと家にいる犬だ。補足として言つておくが犬のほつの名前はホワイティーンという。何故、犬の名前がこんな名前かというと・・・ホワイト・パンティー・モンモン（因みにこれは爺さんが名づけたらしい）を略したものだ。

「じゃ、そろそろ帰つてきてくれないかな？今日から私はちょっと用事があるからね・・・。」

「ぱつ へぱつ <・・・。ふん！」

そういうておばさんは俺たちの目の前から消え、ホワイティーンも瞬きした瞬間に姿を消した。・・・あれ、本当に人間と犬なのだろうつか？

「・・・じゃ、そろそろ帰りましょうか、輝さん。」

少しばかり残念そうな顔で俺を見る葵。・・・まあ、おばさんが言ったんだからしあうがないか。

「葵、久しぶりにあの橋の下にでも行つてみよう。・・・もう、行つてから家に帰ろうぜ？」

葵はそれを聞いて道端で巨大ザリガニを見たような顔になつたが・・・直に頷いて俺の腕にしつかり巻きついたのであつた。俺は苦笑しながらもそのまま一緒に歩き出したのであつた。

「・・・輝さん、やつぱり貴方は優しいんですね？」

「へ、俺が優しいなんていう奴は頭がおかしいよ。ま、考えてみれば俺にラブレターをくれる人間なんてそつそついないし・・・・・俺もいい経験になつたよ。」

俺は葵の頭をぽんぽん叩いて遊園地を出たのであつた・・・・・。」
「うして、俺と葵のデートは幕を閉じたかのように思われたのだが・
・・・。

「輝さん、あれ見てください!」

葵と会つた端の下・・・そこには一人の老人が倒れていた・・・。

「・・・・まさか、爺さんが!」

俺は急いで倒れている老人のもとに駆けつけて抱き起こした。その顔を見て俺が咳いたのがあたりだと知つた。

「・・・・輝、出来れば男じゃなくて女の子が良かつた。・・・ふ、久しふりの娑婆じやつたんじやが・・・運が悪かつたのじや・・・婆に会つてこの有様じや。力を全て使い終えてしまつたわしは・・・消えるんじや。」

そういうつて爺さんの姿は消えてなくなつてしまつた。・・・何しに出てきたんだ?

「あれが輝さんのおじいさんですか?」

「ああ、スケベな爺さんでな・・・今回は何しに出てきたんだ?しかもさつさと退場してしまつたし・・・。」

二人して首をかしげながら考へてゐると・・・・川から何かが出
てきた。

「あ、輝さんあれ！」

「・・・・つて、あれは・・・。」

俺と葵の目の前に現れたのはとてもなくでかい白龍であった。ついには既にくすんでおり、老龍といつ言葉がしつくっていた。

めしゃああああああーー！

咆えるたびに何かが止まる気がする。俺の頭の中でも何かが止まつていく・・・と、そんな咆哮も数分したら止まつた。

俺の目の前で、川の流れはなくなっていた。雲も動いておらず、跳ねた魚は空に浮かんでいた。

「・・・これは一体？」

「どうなったんでしょうかね？」

動いているのは俺と葵だけだ。いや、田の前にいる老龍は怒つてますといつたオーラを出しながら俺たちに襲い掛かつってきたのであつた・・・。ピンチ?

ステージWitch葵

二十、

その二人は再び、叫び声を上げた。

「「きやーたすけて、兄様！！」」

その声に聞き覚えがあつた俺はステージのほうを見た。葵も聞き覚えがあつたのかステージのほうに視線を移す。

「何だ、あの二人か・・・。」

俺の視界に映ったのは黒河好きの双子であった。そして、その双子が見るほうには黒河がこれ見よがしに俺たちを発見して近寄ってくる。

「やあ、偶然だね・・・。白川、葵ちゃんとステージだつたのか？」

「へん、お前だつてあの双子じゃねえか。ほら、先程から助けを呼んでいるぞ？」

ステージのほうからは黒河に置き去りを食らつていいる双子がこっちを向いて助けを求めている。なんだか本気のようでヒーローも悪人も困っているように俺には見える。どうやら、黒河と一緒にいてもいいことはなさそうだ。

「葵、そろそろ次、行こつか？俺たちが邪魔しちゃ悪いよ。」

「・・・そうですね。」

「し、白川……僕を見捨てるのかい？」

「見捨てる？ なあに言つてんだ！ 両方ともお前にぴったりだ。ほら、行つて助けてこい。待ちきれなくなつたのかあの一人が凄い業そうしてこつちに走つてきてるぞ？」

俺が冗談でそういうとあわてたあいつはステージのほうを向いた。その隙に俺は葵の手をとつてその場から脱出したのであつた。

「はあはあ……」ここまで来ればさすがの奴でもついてこれまい。

「まあ、邪魔されたら大変ですかうねえ。せつかくのデートですかう……。」

「こいつと笑つた葵の後ろに何処かで見た二人がこつちを見ている。いや、正確に言うなら一人と一匹か？」

「輝、鼻の下を伸ばしてるんじゃないよ。」

「ぱつへぱつへ……。」

おばさんと家にいる犬だ。補足として言つておくが犬のほうの名前はホワイティーンという。何故、犬の名前がこんな名前かというと……ホワイト・パンティー・モンモン（因みにこれは爺さんが名づけたらしい）を略したものだ。

「じゃ、そろそろ帰つてくれないかな？ 今日から私はちょっと用事があるからね……。」

「ぱつへばつへ・・・。ふん！」

そういっておばさんは俺たちの田の前から消え、ホワイティーンも瞬きした瞬間に姿を消した。・・・あれ、本当に人間と犬なのだらうか？

「・・・じゃ、そろそろ帰りましょうか、輝さん。」

少しばかり残念そうな顔で俺を見る葵。・・・ま、おばさんが言ったんだからしようがないか。

「葵、久しぶりにあの橋の下にでも行ってみよ。・・・そこに行つてから家に帰ろうぜ？」

葵はそれを聞いて道端で巨大ザリガニを見たような顔になつたが・
・直に頷いて俺の腕にしつかり巻きついたのであつた。俺は苦笑しながらもそのまま一緒に歩き出したのであつた。

「・・・輝さん、やつぱり貴方は優しいんですね？」

「へ、俺が優しいなんていう奴は頭がおかしいよ。ま、考えてみれば俺にラブレターをくれる人間なんてそうそういないし・・・俺もいい経験になつたよ。」

俺は葵の頭をぽんぽん叩いて遊園地を出たのであつた・・・。
こうして、俺と葵のデートは幕を閉じたかのように思われたのだが・
・。

「輝さん、あれ見てくださいー。」

葵と会つた端の下・・・そこには一人の老人が倒れていた・・・。

「・・・まさか、爺さんか！」

俺は急いで倒れている老人のもとに駆けつけて抱き起こした。その顔を見て俺が呟いたのがあたりだと知った。

「・・・輝、出来れば男じゃなくて女の子が良かつた。・・・ふ、久しづりの娑婆じやつたんじやが・・・運が悪かつたのじや・・・婆に会つてこの有様じや。力を全て使い終えてしまつたわしは・・・消えるんじや。」

そういうて爺さんの姿は消えてなくなつてしまつた。・・・何しに出てきたんだ？

「あれが輝さんのおじいさんですか？」

「ああ、スケベな爺さんでな・・・今回は何しに出てきたんだ？しかもさつさと退場してしまつたし・・・。」

一人して首をかしげながら考へてゐると・・・川から何かが出てきた。

「あ、輝さんあれ！」

「・・・つて、あれは・・・。」

俺と葵の目の前に現れたのはとてもぬくでかい白龍であった。うひには既にくすんでおり、老龍といつ言葉がしつくらしていた。

咆えるたびに何かが止まる気がする。俺の頭の中でも何かが止まつていく・・・と、そんな咆哮も数分したら止まつた。

俺の目の前で、川の流れはなくなつていた。雲も動いておらず、跳ねた魚は空に浮かんでいる。

「・・・これは一体?」

「どうなったんでしょうかね？」

動いているのは俺と葵だけだ。いや、目の前にいる老龍は怒つてますといつたオーラを出しながら俺たちに襲い掛かってきたのであつた・・・。ピンチ？

パートWitter葵（後書き）

皆様、お久しぶりです。いやあ、いろいろありましてちょっと更新するのが遅くなってしましました。やれやれ・・・まあ、ちょっと不甲斐無いですが、これからもがんばっていきたいと思ひので、たまにはがんばれよていどの応援をお願いしたいと思ひます。

新たなる旅立ち

二十一、

人は、恐怖を目の前にしたらどうなるのであらつ・・・まあ、それが俺の場合であつたら次のようになる。

「葵、お手上げ。」

俺たちの目の前に現れた謎の老龍。何処かで見たような感じがするのだが・・・どこだろうか? うむ、脳年齢が衰退しているかもしれん。

「輝さん、諦めないで頑張つてください!」

「駄洒落か? まあ、話し合いで解決しよひ。」

過去一度、とある龍に襲い掛かつた結果、俺は昇天した記憶がある。それ以降、雷がちょっとばかり怖くなつちました。

「あ~、俺と隣にいる人物は貴方に危害を加えようとは一ミリも考えておりません。どうか、見逃してくれませんか?」

老龍は俺をじろりと見て首を振つた。交渉決裂。いや、まだ、こんなことでやられてしまつたらいつもの一の舞だ。ここは食いついていかないと・・・。

「なら、葵だけならいいですか?」

龍は首を縦に動かした。・・・よし、後は時間を稼ぐだけだ。

「輝さん……。」

俺は近付いてきた葵の耳元で囁いた。

「いいか、急いで家に帰つて碧さんと加奈を連れてくるんだ。出来るだけ早いほうが俺の生存率が高くなるからな……。」

葵が頷いて走り去つていくのを横目で見送つてから、俺は龍から少しばかり距離をとつた。だって、あんな巨体が倒れたら一発で終わるんだもん。

『さて、邪魔者もいなくなつたからはじめようかね?』

「え?」

瞬きした瞬間に龍は姿を消していた。そして、俺の目の前にばあちゃんがいた。その両手には真剣が握られているように見える。

「ば、ばあちゃん……よく切れそつた包丁だね?」

「輝、ぼけてる時間はないよ。さあて、ビのくらう強くなつたのか見せてもらおうか?」

突つ込みなしだすか……。まあ、そんなこんなで老龍はばあちゃんだったのだ。これで爺さんが近くに倒れていたことも納得がいく。爺さん、助けて……。

俺は絶望感に打ちひしがれながらも大地を蹴つて跳躍した。無論、相手が相手なので生きて帰ることはないだろう。

どすつと音がして俺の肩に何かが突き刺さつた。痛くはないが力

が抜けていくのをしっかりと確認することが出来る。Lのままでは・・・
・Lの前とおんなじ展開になってしまつ・・・へむ、俺じやびつす
るひとも出来ん。やっぱ、お手上げ・・・。

「・・・・爺さん、俺に力を貸してくれーーー！」

俺は出でくるはずもなかり、爺さんを呼んだ。今頃、コタツに入つて震えてこるに違ひない。だが・・・。

「輝、急いで離れるんじゃーーー！」

爺さんの顔がしたかと思つと・・・俺は誰かに引っ張られた。

「輝さん、しつかりしてへだせー。」

倒れたときには既に力が残つておらず、首を動かすことも出来ない。しかし、俺は目の前の光景が信じられないでいた。なんと、爺さんがやつてきたのだ。

「・・・・輝よ、短い間世話をなつたな。」

「まあ、全べ世話をじてなにけどな・・・。」

「どうあれど、Lの化け物はわしがどうにかする。じゃあまたな・・・。
・・・」

爺さんとばあちゃんはともに姿を消した。残ったのはばあちゃんが落としていった一本の剣であった。地面に突き刺さっており、それが何よりの証拠であるといった感じである。

「輝さん、顔色が悪いですよ。」

「輝ー！大丈夫？」

「輝君……。」

俺の目の前には心配そうな三人の顔があつたのだが……もつと近付いて確認しようとして……俺は意識を失った。誰かの声が幾度となく、聞こえて気がしたが……おれは睡魔に勝つことなどできる」ともなく、目を開けなかつた。

田が覚めると、そこは爺さんがいる場所であった。しかし、俺の体はベッドにしつかり固定されており、体中包帯だらけである。はい、お約束のマイクロ男です。

「輝、すまんな……抑えよひといのわめじや……。」

そして、隣のベッドにあらゆるヒルを壊折したようなマイクロ男が座っていた。俺より凄まじい……。

「爺さん、ばあさんまでここに行つたんだ？」

「……地獄に向かつた。なんでも、菜々美の夫を見に行くといつておつた。当分は平和に過ぐせるや……まあ、体がこりだから動く」とは出来ないんじやが……。」

「ひや、爺さんはあひやんに一撃も『だる』となく撃沈したらこな……。」

「ああ、輝は別に『だる』を怪我したわけじゃないんだよ。雰囲氣で

れかしてもらひた。」

「…………うかー。」

「因みに、今頃お前さんの肉体は集中治療室じやうりゅうしつ。ま、お前さんの体が大丈夫になるまで、碧さんの言われたところに向かうといい・・・。ほれ、地図じや。わしがわざわざお前のところに行つて渡そうとしたんじゃがな、途中、絶世の美女に会つたので声をかけたらちよづきあの化け物が姿を現したのじゃ。」

え、それって爺さんが悪いんじゃないの？自業自得だらう・・・。

「ま、わしとしては今回は善戦したつもりじゃ。それにな、わしがいつにやつてきたとき、お前さんはお客が来ておつたぞ。道場にこないからな。」

他多数さん一人目

二十一、

俺は包帯をはずしてから道場へと向かつた。今回はきちんと服を着ているので助かつた。

「やあ、久しぶりじゃないか？」

俺の目の前にいるのは白衣を着た危なそうな博士であった。

「・・・誰ですか、あんた？」

「ふ、そんなことを言うのか・・・まあいいだろ、お前に名乗る必要もないからな・・・いでよ、『機龍〇号機・改』」

謎の博士の後ろから・・・その物体は姿を現した。銀色に輝くボディ、赤い光を発する眼光・・・そして、背中にはカッターがついている。

「どうだ、これが君に倒された〇号機の改良型だ！ふははは、存分に苦しむが良い！」

俺は何か恨みを買つようなことをしてきたであろうか？近頃、命ばっかり狙われている気がする。それとも、俺の被害妄想であろうか・・・。

「・・・とりあえず、そのメカの説明でもしてくれないか？ほら、お約束だろ？」

「む、そうだな。コホン、ええ……では、この『機龍0号機・改』とは、先の戦闘でぼろぼろにされてしまった機龍に感情を埋め込み、自爆装置をはずすことによつて考えることが出来るいい子になつたのだ！！しかあし、何故だか知らないが騎士道精神に目覚めてしまい、弱者を助け、強者を挫く性格となつてしまい、ぶつちやけ、悪者の私には牙を向いてばつかりだ。全く、飼い犬に手を噛まれるとはこういうものだな。まあ、それはいいとして、サーチ機能を向上させ、戦闘用というより、サポートが得意となつてしまつたこいつのために、私は新しい機龍を作ろうと思つたのだが、時間がなかつたので、私も戦うこととしたのだあ！！」

長い、長い説明だった。まあ、これで弱点は分かつた。俺はささつと笑つてゐる謎博士のみぞおちに拳をめり込ませた。

動かなくなつたそれを近くに立つてゐるメガに任せると、

「・・・ええと、言葉わかるかな・・・まあ、気がついたら繭さん
に会つておこしてくれ。」

俺はそういうつてその場を後にした。無論、もうこんな変人と会いたくないからである。それに、こんなばかでかいメカとも一緒に居たくない。だつて、無機質なその目は何を考えているのかさっぱりわかんないんだもん！！

しかし、どうやら・・・その場を後にできなかつたようだ。何故なら、奴のあごは俺の頭をあまがみしているからである。いや、手加減してくれているつもりかもしれないが・・・痛いねん。

「…………わかった、何か言いたいのは分かるから嘯まないでくれ。」

鉄の化け物にそういうと、理解したのか俺の頭から離れた。その牙に赤い絵の具のようなものがついているのは俺の気のせいだろう

か・・・・。

ぎじゅしゃしゃしゃ・・・

メカ龍は何かを言つてゐる。

「わからん。日本語喋つてくれ。俺はまだ、外国語は全然覚えてないんだ。」

そういうと、メカ龍は煙を噴出した。そして、その煙が消えると・
・・・お約束として・・・銀髪の女の子がそこに姿を現していた。
名残としてだらうか・・・目が紅く、どことなく恐い。

「・・・貴方を私のマスターとして登録しました。」

「はあ、そうですか・・・。」

「・・・・・。」

俺は黙り込んでしまったメカ龍と同じようになんて黙り込んだ。さて、なんていつたんだろうか・・・。

「御命令を、マスター。」

「待つた、何でお前のマスターが俺なのか説明してくれ。話はそれからでも遅くないはずだ。」

「了解。」

「ホント咳をして、彼女は言った。

「……私は、貴方のようなマスターを探していたからです。これで、充分ですか？」

いや、全然……。まあいいや……。俺は頷いて右手を差し出した。

「よろしく頼むよ……えーっと、名前はなんて言つんだ？」

「固有名称は特になし。どうぞ、名前を決めてください。」

「へへへへ、じつにこのときのために俺は色々考えていたのだ！！

「じゃ、紀伊^{きい}なんてどうだ？」

「仰せのままに、マスター。」

「じつして、俺と紀伊は握手をしたのであつた。まあ、これからどうなるかは分からんが……。」

「マスター、これからどうするのですか？」

「とりあえず、俺の体が戻れる状態になつたら戻るとして……それまでは爺さんに教えてもらつたところに行いつくと思うんだ。」

「了解しました、マスター。これより、『コードネーム』M・G（マスター護衛）』を開始します。」

そういうて紀伊は俺の背中に引っ付いた。あ、弾力のある何かが背中に当たって気持ちいい・・・ま、誰しも間違いはあるさあ！

「・・・・・何の真似でしようか？」

「護衛です。こつじでおけばいつでもマスターを助けられます。」

まあ、紀伊の体重が軽くて助かつた。俺は特に何を持つていけばいいのか分からなかつたのでそのまま外に出て歩き始めたのであつた。

さて、田指すはこじをくだってすぐだうと俺は甘く考えていた。だが、人生といふもんはそこまで甘いのが好きではないらしい・・・

せりあら光る黄金の・・・

二十三、

「歩一歩歩く」と・・・俺の背中に陣取つてゐる危険察知機は俺に忠告してきた。

「マスター、もう少し慎重に行動してください。このエリアには生命体ではないものが多いです、確認できます。」

お前もその一人だろうがと思ったが、紀伊は親切心でそういうてくれているので突っ込みはなしだ。まあ、どうせ突っ込んでも機械だろうから意味がないだろうが・・・。

「大丈夫です、突っ込まれたら何とか対処してみますから・・・。

どうやら心が繋がつてゐるらしい・・・。俺が何を考えているのかも筒抜け。心のプライバシーというのももっと、尊重してもらいたい。何考えたって自由だ。それを実行したら色々と問題がありそうだが・・・。

「マスター、何を考えているんでしょう?」

「いえ、何も・・・。」

俺はやつやと歩き始めた。一向に紀伊は降りてくれないし・・・まあ、いいか。空は青空、鳥の鳴き声も先程からずっとしてゐる。

げばばばばばー!..

俺の田の前をなんだかとつてもおかしい何かが飛んでいた。それは鳥と形容しがたいもので・・・簡潔に言つなら化け物、怪鳥、馬鹿鳥。のいざれかに当てはめることが出来ると思つ。俺の知っている世界には羽が四枚もある金色の鳥は居ない。

「紀伊、あれ何？」

「鳥じゃないんだしようか・・・非常にひつひつ敵意をむき出しているのが分かります。」

その田は猛禽類に似ており、鋭利な爪は車だらうが、象だらうが、あつといつ間に串刺しに出来るに違いない。

「マスター、どうしますか？逃げます？」

「よし、回れ右して逃げよ。無理をするのは良くないからな。」

「了解。」

俺は回れ右して逃げることにしたのだが・・・あつちのまつが早かつたらしい。回り込まれてしまつた。

「マスター、回り込まれましたよ？」

「ぐ、こいつなつたら援護は頼んだ。」

「了解。」

逃げる 失敗 戦つ。すばやさの低いパーティーの王道的な結末。とりあえず、そこいらに落ちていた木の棒を拾つて自分の体調よ

りでかい獲物に襲い掛かつてみた。直後、俺の体は怪鳥の体にぶつかっていた。

「マスター、援護はビリですか？」

「痛いわ、ぼけえ！…どこの誰が仲間に攻撃するんだ……背中に当たつたじゃねえか！…」

「よかつたですね、マスター、寒弾じゃなくて…。」

少しばかり反省の色が見えていたのが良かったであらう…。俺の体に当たったのはそこら辺に転がっている中くらいの石であった。おかげで俺の背中には絶対におかしな傷がついているに違いない。とりあえず俺は振り落とされないうに金色の羽にひつついて羽部分を叩いてみた。

あああああ

急に飛び上がり、空を飛び始めた。ぐ、なんとなく、遊園地に行つたときのジェットコースター気分を味わっているような気がしないでもない。胃から何かがこみ上げてくるような感じが…。おえつぶ。

「・・・・マスター、頑張ってください！！私が貴方をサポートします！」

地上から、嬉しいことを語ってくれているのだが…。悪い、そういうのは俺の意識が悪者にでも乗っ取られたときに語ってくれ。それと、出来れば宵止めでも投げてくれればよかつたんだが…。

「おえええええ。」

俺はたまらず、モザイクのかかつたものを黄金に輝く鳥の背中に吐き出してしまった。それは、熱を帯びており、空を飛んでいた鳥も異常に気がついたらしい……。

一瞬、黄金に輝く鳥は動きを止めた。その瞬間をサポートしてくれるといった紀伊は見逃さなかつた。

「・・・標的、確認！ 投石、発射！…」

下から物凄いスピードで飛んできた石は・・・・鳥の腹に直撃。鳥は断末魔の悲鳴と俺を連れて地上へ突撃・・・・墜落した瞬間に俺は背中から振り落とされた拳旬、近くの木に衝突した。

「あててて・・・・」

見事に頭から直撃してしまった。ふ、モテナイ顔が一段と醜くなつちまつたぜ。そろそろ、自主規制でも掛けでおいたほうがいいかもしねん。

「マスター、大丈夫ですか？」

「いや、駄目だな。俺はもう、モザイクを掛けたほうがいい。」

「? 何言つてるんですか・・・・。」

首を傾げる紀伊を放つておいて、俺は墜落した鳳凰といつてもいい黄金の鳥に駆け寄つた。なんか、黄金の鳥って言つと・・・バーキューに必要なあれを思い出してしまつた。

「・・・マスター、この鳥をどうしますか？」

ぐつたりとして動かない鳥を見ながら紀伊は俺に尋ねてきた。

「そうだなあ、ま、汚物（原産地は俺の胃袋）だけは綺麗にふき取つておかないと・・・それと、傷の手当だけはしておかないとな。」

俺がそう言つと、紀伊は笑つて頷いたのであった。

輝の新たな苦悶の始まり？

一十四、

汚物を綺麗にふき取り・・・ふき取ったのは俺のシャツを引きちぎってタオルの代わりに使った。おかげで、俺のシャツは上半分となってしまった。アンダーシャツを着ているので露出はしていない。

「さて、怪我も奇跡的にしてないみたいだし・・・行こうか？」

「了解、マスター。」

そして俺は紀伊と一人で鳥がいなくなつた道を歩き始めたのだが、ふと、指を鳴らして振り返つてみた。

「金色に光つている毛なんて珍しいから記念に貰つて行こうか？」

「大丈夫なんですか？マスター。」

俺はそんな紀伊の忠告も聞かず・・・鳥の尻辺りの毛を一枚失敬した。その毛をポケットに入れてさあ、出発進行だと紀伊のほうへ振り返つたのだが・・・。

「・・・マスター、今、その鳥動きませんでした？」

「・・・え？」

後ろを振り返つてみると、鳥は動き出した。ただ、動き出した挙句に田も開けられないほどの光を発したのであった。

「うわあー！」

一人して目を塞いだのだが、次の瞬間には既に光は消え去つていった。そして、鳥も消えており、俺たちの目の前に倒れていたのは少女であった。

「・・・・・マスター。」

「知らん。俺は何も知らん。」

この場はさっさと退いたほうがいいと思つたのだが……何故だか、足が動かない。

「のわああつあ！！」

足を見るとその少女がいつの間にか掴んでいたのであった。化け物？

「・・・・・。」

その少女は俺を見上げ、何かを訴える視線を投げかけている。しかし、俺には読心術というものがなく、その視線を避けようどがんばってみたのだが……無理であった。結局、尋ねてみるとことなつた。

「あの、何か御用でしうつか？」

「あの・・・私の体から羽を抜きましたよね？」

今にも泣き出しそうな顔になり、辛そつだ。俺はどうしたものか

と悩んでこると、正直者であつて、紀伊が答えてしました。

「ええ、マスターは貴女のお尻辺りのところから抜いてましたよ？」

途端、その少女は泣き始めてしまった。

「ど、とつあえず……なんで泣いてるのか教えてくれませんか？」

「ぐすっ、私たち、鳳凰鳥族は一枚でも羽を取られてしまえばあつといつ間に力を失い、弱体化してしまいます。普段だつたら取れないはずなんですが……取れてしまったものはもう、戻りません。」

俺は手元に握った金の羽を取り出して戻そつかと提案したが……

「だつて、お尻のところから取つたのでしきう？ 今更、恥ずかしくて出来ませんよ。」

もつともな事を言われてつい、領いてしまつた。うん、そんなことを俺がしてしまつたら警察に捕まるだらう。

紀伊はそんな少女を見て涙を浮かべていた。

「ぐすっ、マスターは血も涙もない鬼畜ですね。」

「お前には言われたくないぞ。」

「いいです、元に戻る方法を私たちが探してあげます。マスター、いいですよね？」

「いいも何も、悪いのは俺だ。しかし……」

「なんだつてこいつを守っていたんですか？」

「それはですね、私がこの土地の守護者の一人だからです。この土地には他にも守護獣という者がいて、この土地を守っているのです。まあ、この先にも色々とありますが・・・」

それはやっぱそうだ。しかし、この先に行かないと聖地とやら似つかないのならしょうがない。どうせ俺の本体も未だに回復していないに違いない。

「グダグダ考えていたつて始まらない。あたつて碎けちつてしまえだ！行くぞ、紀伊！」

「了解、マスター！」

紀伊は立ち上がったのだが、もう一人は立ち上がりていない。俺は不思議に思つて尋ねてみた。

「だつて、名前を呼ばれていません。こいつのは名前を呼んでもらうが必要かと、私は思うのですが・・・。」

「うむ、そんなものどうか・・・だが、俺はこの少女の名前を知らない。」

「名前はなんていうんです？」

「さあ？忘れました。それに、名前なんて覚えてませんよ。貴方がつけてくれて結構です。」

さて、ここにまた名前をつけてあげなくてはいけないなんてな・・・
・機械から紀伊と付けたし・・・鳥だからな。即効性で決めるな
ら・・・

「じゃ、今日から君は小鳥でいいだ？」

「小鳥・・・ですか?うれしいです。ありがとうございます、マスターさん。」

命名理由、小鳥っぽいからだ。性格といい、声といい、体といい
(人型のほう)・・・。

こうして、俺のこいつち側の友達として、機械のほかに鳳凰という
お友達が増えたのであった。このままいけば、なんだか他にも出で
きそうであり・・・なんだか今から名前を考えておいたほうがい
いなと思つ俺であった。

一十五、

俺の背中に引っ付いたまま、紀伊は後ろからあーだのこーだの話しかけてきており、小鳥は俺の鱗で色々とまるで鳥のよつて話しかけてきていた。く、うるせことこの上ない。

「あ、マスターさん、氣をつけてくださいね？ 確かこの辺に……。
」

突如、ずしんと何かが響く音が聞こえてきた。そして、俺の右端のほうから何かが来ている感じがする。

「でかい亀さんがいましたから……。」

そこには、俺の身長は楽に超えているガラモビキが姿を現している。しかし、顔は優しそうだ。多分……。

「ほんにはあー。」

「ほんにはあー。」

「……。」

小鳥と紀伊は挨拶し、俺だけはそのでかさに驚いていた。めちゃくちゃだな、この土地は……。何食えば、こんなでかい生物が完成するんだ？

「ほり、マスターも挨拶してくだせりよ。亀さんは頭下げてるんで

すよ？

いや、その微妙な角度でそんなことを言われても困る。俺たちを見下ろしていいだけではなかろうか？涎らしきものが見えるのは俺だけか？

「あ～、お腹が空いてるみたいですねえ？」この亀さんはワーッぽい顔してますねえ。」

へりへらしながら笑っている小鳥を見て俺は命の危険にさらされていることに気がついた。だんだんと俺たちに近付いてきており、その口を思いつきり開けているのは容易に確認できる。

「紀伊、あの口に向かって投石！小鳥はそれの援助！今すぐ！奴らは俺らをいただきますする気だ……！」

「り、了解、マスター！」

「なんだか分かりませんが分かりました！」

二人とも俺の必死の叫びに何かを感じ取ったのだろうか……。紀伊はすばやくそこいらに落ちていてる大きな石を亀に向かつて放り投げた。口の中に滑つていった石は、亀の顎の力により、粉末タイプへとモードチェンジした。うふふ、俺が気がつくのが遅れていたら俺たちもこんな感じになつてたかも……じょ、「冗談じゃない！」

「食ひえ、爺さん直伝の延髄蹴りい！」

顎を閉じた亀のほっぺ辺りに蹴りをかます。しかし、亀はあります首を甲羅の中に入れてしまつたのでダメージの確認方法がない。

硬いな・・・足が折れるかと思つた。

「マスター、今のうちに逃げたらどうですか？」

「そうだな、逃げよう・・・行くぞ、紀伊、小鳥！」

「「」解――」

俺たちは首を収納した亀から逃げるため、すこりそりと逃げ始めたのであった。

まあ、当然だ。

俺たちの目標は聖地に行くことであつて、亀の餌になることではない。昨今では、ワニガメを放流したりする無責任かつ、迷惑極まりないことをしてくれる飼い主がいるが・・・もしかしてこいつはそんな感じの飼い主に捨てられた結果、ここまでたくましく大きくなってしまったのではないか・・・・いずれ、空も飛んでしまうかもしれない。

「マスター、追いかけてきます！」

「何――せ相手は亀だ――逃げ切るに限る――」

俺たち三人は走つて回つたのだが・・・崖に追い込まれてしまつた。断崖絶壁なのでここから落ちてしまえば俺たちの命は亀の餌よりも役に立たないであろう、物体になつてしまつに違いない。

亀と睨み合つこと、数分・・・俺はある決断をした。

「・・・紀伊、俺を亀に向かつて投げるんだ。」

「な、何を言つてるんですか！マスター！そんなことしたらペロッ

と食べられてしましますよー！」

「ナリです！ペロッと食べられた拳句、ぶりつとそのまま・・・
ぐ、全く・・・」いづらは人の話を最後まで聞くことを発明者と
親鳥に教えられなかつたのか？

「誰も食べられる氣はない！俺に氣を取られている間に後ろに回つ
て攻撃してくれ！」

「間に合わなかつたらどうするんですか、マスター！・・・

「その時は・・・ペロリだるつな。ち、やつてくれー！」これは命令だ
！・・・」

「りょ、了解・・・」

紀伊は俺を抱え上げて何の感情もなしに放り投げやがつた。・・・
・最期ぐらい、何か気のきく台詞を言つてくれてもいいんじやない
んだろうか・・・。例えば、貴方の部下で嬉しかつたと思ひますと
かさあ・・・

俺は腕組みをしながら感慨深げに頷いていたが・・・こざ迫つて
きていくかめの口を見て少々、不安になつた。ま、どうにかなるだ
うつ。

俺の他力本願な願いは珍しく神様に取り上げられたのであつた。
急に亀は苦しそうな顔をすると悶え始めた。俺はその亀の鼻面に蹴
りを入れて地面に着地した。

「小鳥、助かつた。」

「いいえ、当然のことをしたまでですよ、マスターさん。」

亀の後ろ側にいる小鳥のもとに向かうと、そこには亀の甲羅の中に大木を突っ込んでいる小鳥の姿があった。良い子の皆と悪戯っ子の皆、こんなことを決してしては駄目だよ？危険だからね。

「や、気絶してこの隙に行きましょ！」

「やうですよ、マスター！」

俺は念の為と思い、一応、大木を蹴り上げようとしたが・・・その足は甲羅へと当たり、甲羅の欠片が地面に落ちたのであった。途端、亀の体は光りだした。俺はまたか・・・と感じながら目を開じたのであった。さて、どうなるのかな？

ふじとなく、使い捨てキャラが否めない？

二十六、

二度あることは二度ある。

これは、俺がもっと嫌いな言葉だ。

何故かって？それはな、面白くないからだ。

まあ、可愛い女の子に話しかけられるのが三回あればいいが、人外のものとこれ以上フレンドリーな関係になるのはよろしくないんじやないかと俺は思う。うん、人間はやっぱり、人間と友達になるべきだ・・・。まあ、俺としてはそんな考えなのだが・・・。どんなものにも例外と鑄物が必ず存在するわけで・・・。俺の場合、それは相手が可愛いなら・・・。全てオーケーだ。

そんなこんなで、俺は光り輝いていた『元』亀に視線を移した。

「どうも、ますたー。」

にこりと俺に微笑んでくる亀を眺めて俺は心和んだ。そんな俺の頭を紀伊が叩く。

「マスター、でれでれしないでください。かつこ悪いです。」

「つむぎな、どうせ俺はかつこ悪いの。」

再び俺は天然丸出し少女を眺める。

二コニコ笑っているような顔は別に笑っているからではない。

細田の彼女だからこんな顔なのだ。うん、たまにはこんな顔もいいなあ。まあ、身長が俺と同じぐらいのが少しばかり。ポイントを下げるけどなあ。この子の名前は紀^{かなめ}と、紀伊が付けた。俺たちのことを餌としか本当に思っていないからたらしく、聞くに以前何を食べ

たのか全く思い出せないほど何も食べていなかつたらしい。

「まあたーはびこに向かつているんですか？」

「ん？俺たちは『聖地』に向かてるんだよ。」

俺は結局連れて行くこととなつた紀に答えた。小鳥は疲れたのか俺の背中に負ふさつてゐる。紀伊は俺の左にいて、時折、きょろきょろと辺りを見渡している。

「なるほど。なら、氣をつけたほうがいいですよ。」

・

「マスター、なにかいりますっ！――

俺は紀伊にそう言われ、指差したほうを見やる。そこにはなんだか変なものがいた。一角獣という奴であろうか？何処かで見たことのあるような奴である。

「麒麟さんの守護範囲ですから……。」

「紀伊、麒麟つて何？」

決して、お笑いではない。そして、俺はどちらかといふと動物は好きだ。何故なら、動物は人間を裏切らない。動物虐待をする輩は動物愛護法によつて捕まつてしまえばいいのだ。だが、動物についての知識はあるかと聞かれたらノーダ。肉食獣に近付いていつて食われてしまうかもしね。知らないことは聞くに限る。

「マスター、麒麟とは中国で聖人の前に現れるといわれている想像

上の動物ですね。」「

「流石、紀伊だな。うん、博学だ。」「

「じつもあつがとつじがこます、マスター。」「

まあ、「」が中国なんか知らないが……俺は思う。逃げよ。今までのことを考えれば俺たちが襲われる可能性は100%だな。

「マスター、」命令を……。「

「紀伊は紀伊やんを連れて逃げろ……。」「

「マスターか?」

「俺も逃げる……お前らのあとを追つくな……。」「

「了解!マスター!…」

俺は麒麟の横を通り抜け……先に走つていった紀伊の後を必死の形相で追いかけることにした。まあ、かけっこは得意ではないが……「」なつたら焼けくそだあ……！

「マスター、言ふ忘れてましたが……。」「

俺は何とか紀伊の隣におりつぶことが出来た。そして、紀伊は俺に愁傷様といった感じの言葉を述べた。

「マスター、麒麟は麒麟とも呼ばれ、一日二十里も走ることわざでいます。」「

「…………」「

千里=非常に遠い距離。つまり、俺たちがマラソンランナーように早い相手に無謀なかけっこを仕掛けたのだ。聞きまして、奥様？

「だ、だが麒麟も老いぬれば駄馬に駿馬に劣らぬって言葉もあるだろう？」

「やうですね、マスター。だけど……」

「そり、その言葉は合つているが、この場で使う必要など、ない。俺の記憶が正しければ、あの麒麟の鱗はつやつやしていたのだから。」

俺と紀伊の間を通り抜け、何かが俺たちの前に姿を現した。当然のように先ほど置き去りにしてきた麒麟である。

「…………」「

その日はまるで俺たちを足の遅いカタツムリでも見ゆるかついであつた。く、なんてむかつく顔だ。

「マスター、どうしますか？」「

「ひなつたら、俺が困になるから……どうとかしてくれえ！」

「一」「

「ひして俺と麒麟の鬼じみ始めたのであつた。鬼は麒麟。逃げるのは俺。ルール無用で時間無制限。鬼交代なしで、更に言つなら鬼さんに捕まつてしまつたものはどうなるか分からぬ。」

「・・・・百秒数えたら追いかけこいやあーー！」

「マスター、奮闘を期待します・・・。」

「お前も走るのーー！」

俺は紀伊の手をとつて走り始めた。小鳥は未だに寝ているし、紀にいたつては早すぎて眼を回してしまつたらしい。

「・・・。」

一人残つた麒麟は俺の忠告でも守つてくれたのか、きつかり百秒後にその場に残像を残して消えた。

俺は足運いのー

一十七、

俺の後ろに見えるのは残像を残しながらついてきていく麒麟である。紀伊とは途中の道で別れた。

「質量を持った残像だとお！？」

俺はとある貴族の真似をしていつてみたのだが・・・・ううん、彼の心境がどことなく、分かる気がする。

「・・・・・」

黙つてくるのがこれまた怖い。手加減してくれているのは嬉しいだが、黙つてついてきているのでかなり恐怖がある。背中にいた小鳥は紀伊に任せた。

「やりやあーー！」

「・・・・・」

俺は振り向かずまに延髓蹴りをお見舞いしてみたが・・・・お見舞いされる前に面会謝絶だつた。あつという間に避けられ、残像に触ることも出来ない。ふ、動物愛護団体に捕らえられるのはどうやら俺のようだ・・・・。

「やるじゃないーーだけど・・・・これなりだーー！」

俺は近辺に落ちてゐる石を投げまくつた。ああ、やつたなあ、と

あるゲームで・・・石を投げるつていうコマンドしかしてなかつたつけな・・・まあ、それはいいとして、俺は適当に石を投げた。これは、どうせあたらないのは日を見るよりも明らかなので囮だ。

俺は石を投げ終えると、いつもの倍のスピードで一本道を走り続けた。何故なら、俺たちが目指していた『聖地』まであとわずかだつたからだ。聖地まで、走つていけば五分といつ看板まで立つている。つまり、無謀な鬼ごっこだつたが・・・少しほうにも分があるようだ。

「 「 「マスター、援護します! ! ! 」 」 」

「すまん、紀伊、小鳥、紀ちゃん。」

俺と同じように石を投げたり砂を投げたり、はたまた狸を投げたりとさまざまな手伝いをしてくれた三人はいつの間にか俺より先の道に立つていた。つまり、俺の方向へと投擲してきているのだ。

「ががががががつ ! ! !

残像を残せるほどのスピードのない俺は彼女たちが無邪気にかつ、俺想いの足止めたちは見事俺にヒットした。・・・全て。

最後に、狸が俺の頭にヒットし、俺はその場に片膝をついた。

「マスター、大丈夫ですか?」

「・・・いや、限界だ。あの足止めがなければよかつたんだが・・・

最後の狸は効いたな・・・それに、お遊びも飽きたのか麒麟がその角を俺の心に向けている。一度、女の子からしてもらいたい仕

草だなあ。

突進してきた麒麟を避ける力も残っていない。

「危ない、マスター！…！」

「紀伊！…！」

「・・・・・！」

俺と麒麟の間に紀伊が割り込んできた。誰にも、麒麟と紀伊の接触を防げないと思われたが・・・俺だけが紀伊を守ることが出来た。そして、俺は紀伊を助けることとなつた。

「マスター、やつぱ怖いです！…！」

「なにい！…！」

紀伊は俺を掴んで麒麟へと放り投げた。勿論、空中から串刺しにしようとしていた麒麟は避けることなどできず、本来の目的・・・つまり、俺を刺すことに成功したのであった。

「ぐふう！…！」

ああ、なんだか・・・意識が遠のいてきた。ふ、女の子を守つて死ねるなら本望だぜ・・・まあ、どちらかといふと無駄だったような感じが否めないのだが。

「マスター！…！」

近寄つてきてくれた紀伊だが、その前に病院にでも連れて行って

もうこたい。

「笑つてぐださー、マスター……ほら、私が今からギャグを言いますからー！マスター、この小説にはもう、あきマスター（あきました）」

「…………」

パト ツシユ、僕はもう疲れたよ。色々と……。いつして俺はその場で意識を失ったのであった。

「…………」

「あ、輝さんが田を覚ました……」

紀伊か？と思つたが、俺の隣にいたのは田を真つ赤にした葵だった。その隣には加奈と碧さんがいる。

「…………俺はどうしてたんだろ？」

「輝さんはおばあさんの剣に刺されたんですよ。」

ああ、思い出した。そういうえば俺は刺されたんだった。いやあ、痛かったなあ。じつやう、こちらの体の受け入れが完了したみたいだな。

「輝さん、『聖地』には行つて来ました？」

「いえ、まだです……もう少しでいけたんですけど……途中、ギャグに殺されました。」

頭にはてなマークを浮かべる三人に俺は曖昧な笑いを残して俺はベッドから抜き出ようとしたが・・・。

「べうーーー。」

麒麟に刺された箇所にはそれらしき傷が残つており、俺はちょうど嫌な感じになつた。く、あのギャグの恐ろしさが再び戻つてくるぜ・・。

「輝さん、大丈夫ですか?」

俺は首を振つて再びベッドへと体を移して俺を追い詰めたギャグを思い出した。

ルート無し、シコアスな話？（前書き）

今回はギャグが少ないです。

ルート無く、シコアスな話？

二十八、

俺がもう一步で戻つてしまつた『聖地』の事だが……その夜、ベッドで読書をしていた俺のところに鶴さんがやつてきたのであつた。

「輝君、向こうで誰かに会つた？」

「いえ……機械や鳥やら龜やら麒麟などには会いましたが？」

俺がそう答えると、鶴さんは思案顔になつて俺のところに近付いてきた。その田は濡れているよつた感じがしないでもないよつた気がしないでもないよつた……。

「……輝君、ちよつと田をつづりてくれないかな？」

「はあ、わかりました。」

俺は不安にならながら田を開じた。すると、唇に何かが触れたような感じがし、瞬く間に眠くなつていったのであつた。俺は睡魔に勝つ事無く、意識をどこかに飛ばしたのであつた。

「輝君……輝君……。」

「ん……？」

田を覚ますと、俺は地面に倒れているような状態であつた。近くには鶴さんが座つて俺を起こしてくれてこる。

「 いじは・・・？」

「 いじは輝君が『聖地』に行く途中であつちに戻った最後の場所よ。」

地面を見ると赤く染まっている。俺の血だ。良かつた、赤色で・・・。
。昆虫は縁だつたかな？

「でも・・・なんで禮さんがいるんですか？」

俺は不思議に思ったことを口にした。しかしで龍を見たことはあまりない。

「それはね、ひ・み・つー！」

そう、年上のお姉さんから言われてしまえば俺は何も聞くことが出来ない。俺はとりあえず聞いた紀伊達の姿を探してみたが、どこにもいなかつた。

「今頃紀伊ちゃんたちは貴方のおじさんの場所へ言つてるわ。麒麟を連れてね・・・。」

「へえ、会つたんですか？」

「まあね。や、そろそろ行こつか？」

俺は禮さんに連れられて目前として涙を流した『聖地』へとたどり着いたのだが・・・。

「祠しかありませんね？」

「まあ、聖なる地だからね。ま、しょうがないわ。」

一見、小さな祠であつたが……祠を開けるとそこには井戸があつた。

「隠し通路よ。この地下に行けば分かるわ。」

「何がですか？」

「貴方の全て……。」

碧さんはそう言つた。俺は頷き、井戸の下に続く梯子へと手を掛けた。そして、碧さんはおりてこないのかと聞いたのだが……。

「『めん、私は……いけないのよ。』

そう言われたので俺は一人で梯子を降りた。

地下に降り立つと、そこは闇の中ながらも何があるか確認できた。そこには大きな水溜り……もとい、地底湖が限りなく広がっている。それ 자체はどうつてことないのだが……。

しう、じう、じう、じう、じう、じう

その地底湖の中には何かが動いているのが確認できる。そこは、未知の世界で人が絶対にいってはならない領域とでもいっておけばいいのだろうか？まあ、俺が来ている時点で大丈夫だ。

『……生贊となりし者か？』

「・・・え？」

『生贊だと？生贊つてあれだろ、ほら・・・神様の餌つて奴？水面に移る巨大な影には一つの赤い目があり、それは俺を見ている。その大きさは計り知れず。多分、この地底湖全体に体を伸ばしているに違いない。』

『生贊よ、我的存在を知つておるか？』

「さあ？わかりませんが・・・？」

『私は龍の原種だ。遠い、過去に生まれしものだ。今は存在するだけでこの世界のバランスをまるで一股が彼女にばれた男の心境にしてしまうのだ。』

つまり、存在すればそれだけでこの世界に天変地異にしてしまうというのか。

「それで、俺が生贊つて何ですか？」

『私の力を抑えるためにお前が生贊に選ばれたのだ。・・・お前の過去は見せてもらつた。竜と書いてドラゴンと呼ぶからもみせてもらつた。』

「・・・それはどうも。」

『何故、自分がこうにも人外のものに会うかわかつておるか？』

俺は首を振つた。

『それはな、お前は人類からの生贊だからだ。生贊という、お前の存在は大きい。小さき頃から幻影の龍を自ら作り出して、更に、その後実際に会つた龍たちの力を奪い去つた。これはなかなか出来ないことだ。さらに、言わせてもらうが・・・おまえ自身にも少なからず龍の血が混じっている・・・気がしないでもない。』

どっちだよ。

『つまり、お前の体は最高の力がつまっている食べ物。人外達の好物なのだ。だが、お前はもはや誰にも襲われないだろうな。何故ならここで・・・食われてしまうのだからな。この、龍の原種である・・・私にな。まあ、お前を食らうまでには少々、時間がある。話をしよう。』

俺の終わりが近いか？（前書き）

もう少しで輝の物語も終わりです。

俺の終わりが近いか？

二十九、

「あの、貴方の名前はなんていうんですか？」

『さあな。私の名前など、不明だ。そうだ、最後の機会に教えておくがお前が会つたあの三匹の守護者たちは私の妄想だ。』

「いなかつたつてことですか？」

『ちよつと違うな。確かにいた。現にお前の記憶には未だにいるだろ？』

「ええ、います。」

『忘れなければ思い出は何時までも傍に居てくれる……だが、それは所詮、思い出だ。お前が居て欲しいと思つほど……苦しみは増える。まあ、そんなくらい話はおいておいて少しばかり面白い話をしゃらう。』

「？」

『私は男と思うか？』

『いえ、女じゃないんですか？』

『当たりだ。何故、そう思う？』

『……母なる海つて言つて……まあ、これまで人以外のもの

にあつたときは全て女の子だつたし……。」

『まあ、いいだろ？。ならば、私が人型のときの姿を見せてやるつ
か？。』

「ええ、冥土の土産に見せてください。」

『良かれり。ちよつと待つておれ……。』

「…………。」

『どうだ、この姿は？私の人型のときの姿だ。』

「つて、メイド服じゃないですか！－！何ですか！」

『それはな、お前の妄想が作り出した龍・・・穂乃香を通じて知つ
たのだ。それ以降、私はメイドになつてみたいと思つていたのだ。
どうだ？似合つているか？』

「ええ、確かに似合つてゐるとは思ひますけど・・・後ろの地底湖
凄いことになつてしません？」

『そうだな、今ではほとんど水はないだろ？な・・・まあ、泳いで
みれば分かるが未だに物凄い広さだ。また、私が元の姿に戻れば水
かさは今の比ではない。といひで、お前の姫はなんと言つへ、最後に
聞かせてくれ・・・。』

「・・・・白川 輝です。」

『そつか輝と言つのか。・・・輝・・・悪いがお前をおいしくいた

だかせてもらひおひ。』

「・・・・・・・」

『・・・輝、何故抵抗をしない?』これまでのお前だったら大半が抵抗をしてきたはずだが?』

「まあ、綺麗なメイドさんに襲われるならじょうがないと思つたんですよ。それに、俺を待つてゐる家族なんて一人も居ないんですよ。へへ、卑屈になつてしません。飯がまずくなりますよね?』

『そういうわけでもなさうだぞ?ほひ、お前が言つ家族の定理は何だ?』

「血が繋がつてゐる事ですか?』

『私が思つには心が通じ合つてゐるものたちのことだ。輝にほこの声が聞こえないのか?』

「あ・・・ああ~・・・」

「・・わいわい・・・」

「・・・・なさい、ああ・へ・・・」

「・・・れは・・・嘘の声?」

『せうだ。お前の事を心配してお前のお前の家族たちだ。あの娘達はお前と同じような境遇だろ?。元来、龍はお前たちの世界に居ない。そんなあこづらはお前を求めるよ?』お前の元へと現れたのだ。輝、

お前が返事をしてやらねば皆は悲しむだらう。』

「だけど、貴女は！？貴女の事はどうするのですか？」

『私は・・・私が求めるものを待ち続けるさ。もとより、私がここにいる理由はその求めるものを持つてゐるのだ。姿はどうであれ、私は何を求めているのかも分からぬものを待つてゐるのだ。ほら、早くしないとそろそろ私の気が変わるかも知れんぞ？』

「・・・わかりました。それと、ありがとうございます。』

『何、当然の事をしたまでだ。だがな、輝・・・実際のところ・・・私にはその力は戻っていないのだ。』

「！？どういう意味ですか？」

『成績というものはたしてわるものだ。強き力を持つ我と、生贊としてやつてきたものの力を足して一で割つてきたのだ。それを続けてきて、とうとう、割り切れなくなつてきたようだ。だが、もう少しの間だけは・・・待ち続けていたい。輝に、言いたいのは私の事を覚えていて欲しいのだ。』

「・・・貴女の事は忘れません。失礼します。』

『お前が、お前の両親のようにあつてよかつたよ。お前なら、私の事を覚えておいてくれるだらう・・・。ほら、ロープが降りてきたぞ・・・闇の中にはな、光があるものだ。その逆もある。輝、私もお前の事は忘れない。』

俺はロープを掴んだ。すると、上に居る三人がロープを掴んで引

つ張りあげているのか知らないが……体が浮上していっていることに気がついた。メイド姿の龍の原種の姿は段々と小さくなっている。

俺は井戸の外へと上げられた。

そこには、三人が笑顔が確かにあった……。

俺は、このことを忘れてはならないと思いながらも……闇を忘れないと思っていた。しかし、俺は龍の原種と約束をしたのだ。この約束だけは絶対に守りたいと思う。まあ、これからどうなるかは分からぬのだが……俺としては俺を頼ってきてくれたのか知らないがこの三人の龍達と仲良くやって生きていきたいと思う。

「ところで、輝はここから帰る方法を知ってるの」

加奈が告げる、俺たちは揃って首を振った。まあ、今は幸せだ。
それは言える。

猫の言葉はわからない

三十、
帰りたい、帰れない。いや、正確に言つて帰る方法がわからない。
そんな経験ないでありますか？例えるのなら、くるくる回転ドアに入
つてしまい・・・出ようとするがタイミングをなかなか見出せない。
そんな感じだ。そして、俺・・・いや、俺たちはそのような状況に
陥っていたのであった。

「あ～、困ったなあ。」

「輝さん、全然困っている感じがしてませんよ？」

「せうだ、もう少し困ったような感じになつたまうがいいんじゃな
いのか？」

「まあ、言つても始まりませんし・・・輝君、とりあえずお爺さん
がいるところへ行きませんか？」

最年長者の一声により、俺たちは行動を開始したのであった。

「よお、輝・・・。」

爺さんは既に包帯を取つておりその顔には無数の傷が残つてゐる。
まあ、見た目的には元気そうであり、既に死んでいるといつても過
言ではない気がしてならないが・・・ここはスルーするのが基本だ
と俺は思つ。

「爺さん、あつちに戻れなくなつてゐる気がするんだが・・・戻る

方法ないのか？」

葵達はこじこまじない。俺としてほしの爺さんが葵達にちよつかいを出す可能性が非常に高く、更に、それを笑いの種にしてしまつとわかつてゐるからだ。

「わうじゅ のう・・・ちよつと玄さんへ聞いてくるから待つておれ。」

玄さん・・・誰だろうか、それは・・・俺も結構こいつに来ていたのだが・・・初めて聞く名前だな・・。

「爺さん、玄さんって誰？」

「玄さんはな・・・まあ、言つなれば大工の棟梁じや。がさつな性格で一本氣・・・わうじゅ のう、典型的な頑固親父じや。」

しみじみ頷く爺さんを見ていて俺は簡単にその玄さんの顔がありありと浮かぶよつであつたが・・・。

「お、玄さんじや。」

そこにはいたのは黒猫であつた。頭に鉢巻をしているのがいかにも大工の棟梁のようだ・・・までまでまでい・・・

「爺さん、これが玄さんか！？」

頷く爺さん。

「わうじゅ。これぞ、大工の棟梁、玄さんじや。姿こそ、猫じやが

な。」

「「や～ん。」

おーおー、今、めちゃくちゃ猫みたいな鳴き声発したじゃねえか
？本当にこの猫は頼りになる偉人さんなのだろうか？

「さて、ちょっと皆さんに聞いてみるかのう・・・。」

そうして爺さんが取り出したのはどうからどう見ても猫語翻訳
機械であった。

俺の物語の結末！

三十一、

「玄さん、何故、輝たちはあひうの世界に戻ることが出来ないのじ
やひうか？」

「「いやーん、「いやーん、「いやーん。」

「成る程・・・。」

爺さんと猫は先程からずっとこんな調子だ。俺にはさっぱりわか
らん。・・・・いや、きっと爺さんにもわかつていな」と思われる。
先程から必死になつて機械を眺めているからな・・・。

俺はこれからどうしたらいいのか考えていると、話し終わったの
か爺さんは台所へと姿を消し、猫缶を持ってきた。そして、それを
猫の前に置く。

だが、猫はその餌を拒否。

「ああ、玄さんは煮干派じゃつたな。すまん、わすれとつたわ。」

成る程、これが頑固なところか？かなり粋な口をしている猫だ・
・。

猫が煮干を食べ始め・・・俺は爺さんからどうのうにしたらあ
の世界に戻れるか聞いてみた。

「簡単じゃ。一人、犠牲になればよい。世の中、ギブアンドテイク
じや。まあ、犠牲といつても帰るのがちょっと遅くなるだけじや。」

「そつか・・・なら、俺が犠牲になろう。」

俺を追つてきてくれた皆のためだ。それに、ちょっと帰るのが遅くなるだけなら構わない。今更、そんなことを言つている場合でもない。猫に何をされるか分かつたものでないが、ここは、大人しくしておこう。家族のために・・・。

「なら、あちらの世界に戻したい連中を玄さんのところに連れてくるんじゃな。ほれ、玄さんが機嫌のいいうちにな？」

「わかった。」

俺は三人を連れて黒猫の前に姿を現した。猫は粋な座り方をしており（なんとなくだ。なんとなく、そんな感じに見えるだけだ。）いつでもどうぞといったところであった。

「本当に、輝さんは戻つてくるんですね？」

「ああ、本当に。」

「嘘じやないよね？」

「大丈夫だ。」

「帰つてきてくれさいね？」

「ぜひとも、帰らせてもらいます。」

俺は三人にそいつて別れた。猫は三人の前を歩いていき、道場のほうへと姿を消した。そんな、三人の後ろへと向かって俺は叫ぶ。

「・・・・・また、いつかな・・・・俺は、お前たちの事を忘れない
！！」

三人が驚いて振り返ったような気がしたが・・・・爺さんが際どい
ところで扉を閉めてしまった。

「輝、何も焦ることなんてない。」

「だけど・・・・そうだな、俺が間違つてた。ちょっと帰るのが遅
くなるだけ出しな。」

俺は猫が食べ残していった煮干を口に運んで何かを飲み込んだ。

それから、数日後・・・・・。

葵は青空を眺めて溜息をついた。そこは、彼女が輝とあつた初
めての場所であった。今日は少々遅い、夏祭りがある日であった。

「輝さん・・・・・。」

葵は溜息混じりに視線をそらし、そろそろ帰ろうかと立ち上がり
たのであった。そこへ、加奈と碧が一人してやつてきた。

「葵さん、どうかしたの？」

加奈は思いつめたような顔をしている葵へと声を掛けた。彼女は
毎日のよつに学校が終わったら部活にも行かずにこの場所へと足を
運んでは夏なのにザリガニを探したりしていたのであった。

「・・・・いえ、なんでもないんです。加奈ちゃん、碧さん、輝さん
は帰つてくると思いますか？」

その質問に、二人は顔を曇らせた。

「帰つてくる……よ。だって、帰つてくるひでいつたもん。」

「やうですねえ、帰つてくるといいですね。」

「一人ともほつきりしたことは言えない。何故なら、三人と輝が別れる時、なんとなく、もう会えないんじゃないかといった感じを覚えたからであった。

「……やうですね、まだ、分かりませんよね?」

「気長に待ちましょ。せつと、じりじりかしますよ、輝君なり。・・・

・。」

「やうだよね、輝なり、じりかますみやね?」

「ま、俺なら帰つてきてるんだけどな。じりじりも、じりじりのまちよつと苦手で……タイミングが分からんね。」

「やうですね……ちよっと、氣恥ずかしいですよね?」

「うさ。」

「やうですね。」

「……」「」

視線は輝へと注がれていき……視線が集まってしまっていた

輝はどうかしたのかといった感じで三人を見比べた。

「あ、そういうえばまだ言ってなかつたな。ただいま、みんな。」

「「「おかれりなさい……」」

青空の下、輝は家族たちに抱きしめられてこちらに戻つてこられ
たことを何処かの誰かに感謝した。これまでの事を思い出し、やつ
ぱり、帰つてこなかつたほうがいいかも知れないとちょっとだけ思
つたのは気の迷いかかもしれない。かくして、輝は家族と一緒にお祭
りへと出かける準備をしたのであつた。
～輝編 完～

俺の物語の結末！（後書き）

さて、どうだったでしょうか？おもしろかったでしょうか？これで、輝の物語も一段落つきました。これも、皆様のお陰です。

葵（前書き）

三種類の終わりを作つてみました。内容はそれぞれ違います。

おまけ～葵～

あれから、数時間後・・・俺は皆とはぐれて迷子となってしまった。めったにこんなお祭りに来ないし、その昔、財布をすられたこともあるのでできれば人ごみは勘弁してもらいたいのだ。まあ、こんな感じで俺は一人、ふらふらと人ごみの中をまるでくらげみたいに歩き回っていたのだった。

「・・・はあ、皆どこ行つたんだ？」

俺は一人射的の前で時間を潰すことにしてた。時間がたつて人も少なくなるれば会う機会が増えるに違いない。

「おじさん、チャレンジするよ。」

「あいよ。」

俺は射的のおじさんから銃を渡され、品定めをする。

「さて、どれをねらうかねえ。」

上のほうにはゲーム機が置かれており、こんな銃でビリヤッて落とすのだと聞きたい。いや、落ちないだろ?なあ。なら、下のほうのお菓子でも狙つてみるか・・・。

「せりゅ。せりゅ。」

狙つた獲物とは違うものが獲れた。なんだ、この変なぬいぐるみ

は？赤い、バルタ 星人か？

「あ、いたいたあ！…輝さん、何してるんですか！皆心配していますよ？」

「葵…いやあ、上かつたよかつた。迷子になつてたんだよ。」

「言われなくとも分かりますよ。」

そして、今度は俺の手元に居る赤い物体を眺める。目から、『お母さん、これ欲しいよ。』光線が出ている。まあ、あれだな…。葵には色々と世話になつてているし、たまたま取れてしまつたものだ。やつても構わないだろ？。

「葵、プレゼントだ。」

「え、いいんですか？こんな可愛いのもらひて？」

あいにくだが、これを可愛いといえるのはお前ぐらいだろ？。
俺には一ミリも必要ない。

「ありがとうござります。」

そんなに嬉しかったのだろ？葵は終始、二三三二顔であった。

「さてと、なら…もうひとつだけ弾が残つてゐるから全部使い切るか。」

俺は残りの弾を一番重たそうなゲーム機に向けて連続発射した。

「坊主、またチャレンジしてくれよ?」

「……まあ、今度はもうちょっと軽いゲーム機でもおことこしてくれるト嬢っこですがね。」

俺は、葵と手を繋いでその射的屋を離れた。何故かつて?まあ、当然のよつてゲーム機は手に入らなかつたからや。

「葵、歸せびるだ?」

「え、あつむじやないんですか?」

適当な方向を指差す。

「……もしかしてだが、お前は集合場所を知らないのか?」

「い、え、確か……あつむの方向ですよ。」

そして、先程とは違う方向を指差す。

「ど、どなだ?」

「迷子の子が泣いていたところを落ち合つていていたんです。」

俺たちの前を泣いている男の子が母親の手につながれて歩いていった。

「マー君、お母さんの手を離してや駄目よ。迷子になるからね?」

「うふ。」

こうして、迷子は一人になってしまった。やれやれだぜ。
その後、俺と葵は一人でゲーム機を落とすために所持金のほとんどを射的屋に使い込んだのであった。

「葵、なかなか一人とも迎えにきてくれないな？」

「そうですね。」

こうして、俺はその日の祭りをほとんど無意味に過ごしてしまったのである。

結局、俺と葵の両名は祭りが終わりを告げるまでその場いた。二人とも先に帰っているだろうと思つて俺は葵の手を握つて家に帰ることにした。

「葵、手を・・・離すなよ?」

「輝さんこそ・・・きちんと手を繋いでないとすぐに何処かに消えますからね・・・。これから先は、私がきちんと貴方の手を握りますよ。」

「へ、俺は子どもじやないってのー！」

俺と葵は一人して暗くなつた帰り道を歩いて帰つたのであった。

（葵工ンド）

加奈（前書き）

三種類の終わりを作つてみました。内容はそれぞれ違います。

加奈

おまけ～ 加奈～

あれから、数時間後・・・俺は迷子となってしまった加奈を探す羽目になってしまったのであった。少し、目を放してしまった隙に何処かに消えてしまったのだ。葵たちとは射的屋の前で三十分後に待ち合わせをしている。

「・・・どこ行ったんだ？」

俺は人ごみを掻き分けて探す。全く、迷子になるなんておこちやまだな。俺が小さい頃はな、その～何だ、迷子なんて多分、なかつたぞ？

「・・・加奈～、どこここいるのかなあ？」

まあ、なかなか見つからないな。ちょっと、不安だ。もしかして・
・・・誘拐か？身代金か？

「ねえ、お嬢ちゃん、一緒に祭りまわらない？」

そんな時、不良グループの一角と思われる連中が少女を誘つている場面に出くわした。

「無理よー私はちょっと迷子なのー！」

「うむ、そのお嬢さんも気丈に自分が迷子だと訴えている。おいおい、自分から迷子つて言つのもどうかと思つがね？何処かで聞いたことのある声だな？」

「なら、探してあげるよ。ほら・・・」

男が手を伸ばした先には加奈が居た。加奈はぱりぱり俺の顔を見つけたようだ。

「お兄ちやん・」

「お兄ちやん!・?」

加奈は走りよってきて俺に引っ付いた。

「なんでも、家族できてんのかよ? しけてやがりあ。」

「どこの不良だ、お前は。まあ、不良は次の獲物を探しに消えてしまった。」

「加奈、ちゃんと葵の手をつないでいろいろ言つたじやないか?」

俺は「」の間に手ながきんちょを叱る事にした。

「だつて・・・」

「だつては言い訳!・!」

黙りこむ加奈。ちょっと言い過ぎたのかもしない。ま、まあ・・・

・「」あれだ、なんだか近くの人の視線がかなり痛いのでそろそろ許してやつたほうがよさそうだ。

「まあ、何事もなかつたから俺も探してよかつたよ。ほら、泣くん

じゃない。」

俺は泣いている加奈の手を引っ張つて歩かせることにした。急いで何とかしないと警察が来てしまってどうだ

「ほら、りんご貰買つてやるから泣くなつて。」

「う・・・ん。」

近くからはなんだか非難の声が聞こえてくる。

「物で誘つてるよ・・・。」

そんな声が聞こえてきている。ふ、しょうがないじゃないか。だって、俺はどうしたらいいのかさっぱり分からんんだもん。ここは急いで葵たちの元へと行かなくては・・・。

「加奈、葵たちのところへ行くぞ?」

「ちょっと待つて・・・輝、足怪我してるからおんぶしてくれないかな?」

いつもは小生意氣などこのある加奈がそんなことを言つている。まあ、たまにならいいか。

「大丈夫か?」

「うん。輝、ごめんね?」

「何がだ?」

「迷子になつたこと……まだ、怒つてるよな?」

俺はどう答えたものかと悩んだが、一つの結論を出した。

「まあ、迷子はよくあることだ。気にするな。」

後ろのほうだから加奈がどんな顔をしているのかは分からぬ。

「ありがと、お兄ちゃん。」

「何か言つたか?」

「……別に。」

加奈はそれまで出来るだけ俺に体重を掛けないように努力していたのか、急に体重を掛けってきた。

俺は、途中、加奈が何かを言つたような気がしたが……聞き取ることは出来なかつた。

「輝……お兄ちゃん、ずっと、一緒だよ。」

～加奈エンド～

碧（前書き）

三種類の終わりを作つてみました。内容はそれぞれ違います。

おまけ～碧～

あれから、数時間後・・・俺はそろそろ集合時間へと近付いていることに気がついた。今回の祭りは、それぞれ好きなことをするところ」とばらばらに行動していたのだ。

「さて、そろそろ・・・皆が待ってるかな？」

「お～い、輝君！！」

あちらのほうに居るのは碧さんの様だ。両手に食べられるのかと聞きたいくらいの大量の食べ物が握られている。

「皆はまだですか？」

「ええ、さつき一人にたまたま会つたけど、葵ちゃんは射的に夢中で、加奈ちゃんは不良を倒していたの。」

どうやら、他の二人が来るのは本当に後になりそうだ。まあ、あの二人の事だから大丈夫とは思うが・・・まさか、そこいらの人を襲つて食べるってわけでもないだろう。

「私もね、途中おいしそうな人がいたんだけど、これ買って我慢したの。」

「・・・・。」

忘れていた。碧さんが人にかじりつく癖があつたのを・・・当初、

俺も嘔み疲れた記憶が生々しく覚えていた。まあ、今日は色々食べてるから大丈夫であろううが……。

「輝君、ちょっと何か食べに行かない？」

「え、ええ……いいですよ。」

俺は世界が平和になる選択肢をえらだつもつだ。もしも、ここで拒絶していたら俺が食われる。それは断固として拒否したい。

「うふふ、デートね？」

「そうですね？久しぶりのよつな感じがします。」

俺は體をとくついて歩き、色々な屋台の食べ物を総なめにしていくことにした。ぶつちやけ、俺としては一件田のたい焼きでギブアップだ。

「ほりや、はへない？」

「何を言つてるか分かりませんよ。それ、これ、食べなつて言ってるのならいません。少々、食べ過ぎましたから……。」

「ほ・・・」

ああ、俺はいつの間にかこの人が何かを口の中に入れていても何を言いたいのか分かるよつになつてしまつた……まあ、いいことなんだろうな。

「輝君、この前は騙すよつな感じで『聖地』に連れて行ってごめん

なさいね？私がどれだけ謝つても償えないことだと思つてゐる。」

俺はポツリとそんなことを言つた碧さんの悲しそうな横顔を眺めた。嘘をついているとは到底思えない顔である。まあ、俺の目がかしいだけかもしれないがね。

「いいですよ。例え、騙されていても俺は碧さんに騙されるなら本望です。」

「・・・ありがとう、輝君。」

俺は、少し元気になつた碧さんの顔を見れただけで嬉しかつた。誰にでも、嬉しそうな顔は似合つ。嬉しい顔を偽らなくてはいけない人は俺から見たら悲しいのだろうと思つ。

「あ、そろそろ戻りうつか？」

「そうですね。」

「帰つたら勉強ね？」

「うぐ、や、そうですね・・・。」

俺は綺麗な横顔の碧さんをちらりと見た。

「あ・・・。」

「あ・・・。」

目が合つた。碧さんの頬が赤く染まる。

「輝君、何を見てるのかな？」

「碧さんの顔です。綺麗ですよ、その嬉しそうな顔。」

俺は碧さんの照れ隠しのはたき攻撃をすんでのとひりで避けた。ふ、流石に碧さんのお願いでもあのびんたを食らひつたら立ち上がりなくなるかも知れんぜ。

「一ひり、避けるな！」

「危ないですってーー！」

「年上のお姉さんを馬鹿にすると許さないわよ？」

俺は碧さんより先に一人が待っている場所へと駆け出した。俺の後に碧さんが続く。

「輝君、もう、私を置いていかないでね？」

（碧　エンド）

本氣で終わりーー皆様ありがとうございましたーー（前書き）

終わり終わりと書つてしまおましたが、今回でおわいとなつます。

本気で終わり！－皆様ありがとうございました！－

おまけ 謎探偵 葵

今日も、探偵のもとに依頼が来る。

「葵さん、依頼ですよ。」

「本当だな、輝君？また、ペット搜索か？それとも、ストーカーを搜索するのか？」

半ば、うんざりした調子で新聞を閉じて助手の輝を見やる。

「いえ、今日は下着泥棒を逮捕することです。」

「やつ？ま、しょうがないから向かいましょう。輝君、車を出して。」

「

「わかりました。」

助手は

「なんで俺が助手なんだ」

と呴きながら外に出て行った。探偵はコートを着て外に出る。やつてきた年代物の車に乗り込み、運転席に居る助手にどのような状況でどれほど盗まれたのかを尋ねた。

「深夜一時くらいですかね？依頼者の加奈さんが物音がしたのでベランダのほうへ向かうと、そこに頭からパンツをかぶった怪しい人物がいたそうです。びっくりしている隙に二階から飛び降りたみたいですね・・・依頼者の加奈さんも度胸があるのか知りませんが、

二階から飛び降りて犯人を追いかけています。そこで、四人の容疑者まで絞り込んだそうです。」

「四人まで絞り込んだのなら、別に私を呼ばなくていいんじゃない？警察にでも頼んでくださいな。」

「まあまあ、そうしないと話が進まないんですよ。」

不満を隠そともしない探偵をなだめながら助手は依頼者と容疑者四人が居る待ち合わせ場所へと車を走らせたのであった。

「はあ、俺が探偵やりてえよ。」

「何か言つた？」

「何も言つてしません。」

場所は依頼者の部屋で、容疑者の方々は大人しく揃っていた。

「まず、一人目の容疑者が黒河 暗ですね・・・お坊ちゃまです。被害者との接点は同じ会社に勤めている社長と秘書という関係です。」

「次。」

「次は、隣室の碧さんですね・・・隣人さんとはよく、話をしているそうです。ただ、ちょっと碧さんは変わった趣味をお持ちだとか・・・」

「成る程、次。」

「次は、ザリガニ星人さんですね。地球には、観光にきていたみたいで。その日はこのマンションの上に飛行船を着陸させて降りていたそうです。」

「おーしそうね、後で後ろから襲うわよ。最後は？」

「」のマンションの管理人さんです。名前はわかりませんね・・・戸籍抹消されていらっしゃるようです・・・爺さんと呼ばれています。」

全ての容疑者の紹介が終わり、今度は依頼者からの詳しい話を聞く。

「そうね、ちょっとびっくりしたから後れを取つたけど・・（中略）
・・とりあえず、この人数までには絞り込むことが出来たわ。」

探偵と助手は話し合つた。

「まず、ザリガニ星人ではないわね。あんなはさみで下着を掴んだら切れちゃうし？」

「そうですよね？」

「それに、この物語でこんなことをするのは決まってないかしら？」

一人は何かをぶつぶつ言っている爺さんの下へと静かに近付く。

「犯人はあ、おまえだあ！…」

探偵の蹴りが見事爺さんを捕らえたかのように思えた。だが、爺さんはまるで強風に飛ばされるような葉のよつに見事その攻撃を受け流した。

「ふふ、おぬし、なかなかやるな？わしがぶりていーなぱんていーを盗んだ犯人だと氣づくとはな？」

「いや、あんた以外は無理だろ。」

助手はさりげなく呟く。

「じゅが、それもこゝまで・・・・わいばみじゅ、おせりーーわしついてこれるかな。」

爺さんは文字通り、無茶なことをやつてのけた。その場にガクリと倒れてしまい、なんだか、背中辺りからHONJEWL・ウイングを出現させて天に昇つていった。

「ぐ、まんまと逃がしたわね？しかし、今度はそういうまくいかないと思ひなさい！」

「いや、根本的に無理でしょ！？」

俺はなんだか、嫌な夢を見ていたようだ。いや、しかし……かなり現実的な夢だった。

「輝ちゃん、おせよひいざれこまわ。」

「輝、起きあがの遅いよ。」

「輝君は低血圧ですねえ。」

俺のベッドの周りに三人はそれぞれ立つており、よく似合つた
ロン姿で俺を覗き込んでいる。ちょこと、寝過ぎてしまったよう
だ。

「輝ちゃん、今度、探偵映画見に行きません? 四枚、チケットもひつ
たんです。」

その申し出に、俺はなんだか悪寒を覚えたが、黙つて頷くこと
した。ま、まあ・・・俺の予想は裏切られないだろうな? だが、
俺は後でそのことこづいたのであった。『『龍と書いてなんと呼
ぶ?』終』

本氣で終わり……皆様ありがとうございました!!（後書き）

え、本当に今回で終わりを迎えた、『龍と書いてなんと呼ぶ?』。最後まで続けられたのは皆さんのおかげです。今後のことはほとんど決めてませんが、そろそろ、話に終わりをむかえそうな小説から書いていきたいと思います。続編は考えてませんが、この小説が人気があったのなら、書きたいと思います。最後ですが、評価してくださいました皆様、本当にありがとうございました。中には、メルセージまでくれたかたもあり、うれしかったので一応、書いておきます。また、どこかで会いましょう!!

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2523b/>

龍と書いてなんと呼ぶ？～他多数～

2010年10月8日21時12分発行